

# 分析美学エステティシャン

## 抽象物としての芸術作品

渡辺公暁

1

遠慮がちな咳に似た音とともに計器が収容物の定時レポートを吐き出すと、貨物室はまた静かになった。無機質な黄色の代替ナトリウム光のもとで、二人のロボットがじつと立っている。二人のあいだにあるのは、光学的にもまた力学的にも幾重にも防護された、彼らの腰ほどの高さの立方体ケースだ。ケースは不透明な灰色なので、計器が示す温湿度その他の情報を除けば、内側の様子はまったくわからないが、中には彼らの警護対象である芸術作品が、不意の動きを防ぐ固定剤に塗り固められて、おとなしく入っているはずだった。正確には、芸術作品の一部とでも呼ぶべきものが。

「他の持ち場はぶじに済んでいるだろうか？ R・イナナキ」

問いかけてから、R・イナナキは辛抱がよく待った。相方はいま、記憶のガベージ・コレクション作業の最中だった。星間輸送船のように外部から隔絶された環境では、ロボットは自らの膨大で非定型的な記憶がパンクしないようにするため、記憶領域となっているキー・ヴァリュー・ストアを短い周期で整理し、意味を保ったまま容量を最適化しなければならない。

ややあつて、励ましが返ってきた。

「R・サエズリ、心配はいらないよ。なぜなら他の持ち場に何かあれば、監督からの報告がその映話機を通じてすぐに来るはずなのだから。それに、ささいなトラブルはあったが、明日にはわれわれを含め、すべての輸送船がぶじに着陸予定だ」

R・イナナキと呼ばれた長身のロボットは、視覚センサを復帰させると相方のR・サエズリに歩み寄り、気づかうように腕を叩いた。その手を覆うのは人工皮膚だが、口

ボットといっても彼らの体格は人間とほとんど変わらない。人工皮膚は茶色を基調とした濃淡あるもので、色合いこそ木目をイメージさせるものの、柔らかさは板よりも革に近い。

「先ほども説明したように、きみの心配は確率的に見てほぼ実現しようもないことだ。磁気嵐や大気圏突入の失敗といった航空的問題は、いま皆で使っている型の星間輸送船にはこの五十二年と八か月起きていない。それぞれの船長の経歴も立派なものだし、どの輸送船の貨物室も特別製の防壁に囲まれていて、出入りには中にいる警備員の承認が必要だ」

二人は、セキュリティ関連会社コースガードに雇用されるロボットだ。彼らが乗るのは、惑星ジェイへと宇宙空間を進む星間輸送船、TSU5号。彼らとは別のユニットも、別の星間輸送船へ乗り込み、二人と同じく惑星ジェイへの輸送警護にあたっている。運ぶのは新進気鋭の哲学的アートクリエイター・イクタによる特異な作品、『美その

もの』。惑星ジェイで近く催される展覧会で、これまでは別々のアトスペースに展示されていた造形物が、数十年ぶりにひとそろいになるのだった。

「貨物室の中の警備員どちらかと、それから緊急事態以外は別室で睡眠状態にある、美術品管理人の認証もだ。内外から同時に特別な物理錠を用いないかぎり、たとえ賊が何らかの方法で輸送船に突入したとしても、貨物室に入って何かを盗みだすことはできない。もちろん何事にも例外はあるが、きみはその点も、確率的計算によって論証してくれたね、R・イナナキ」

「そうだ、だいたい二週間前に、細かく説明した。必要なら、そのときの会話記録を再送しようか？」

R・イナナキも含め、ロボットどうしの会話においてあいまいな数値が使われることは珍しい。「だいたい二週間前」とR・イナナキが述べたのはもちろんわけがあつて、いま彼らの体内時計の時刻調整は、ある理由から若干あいまいなのだった。

「ありがとう、記録は私も持っているから問題ない。だが、その後に私が至った結論は、あのときとは少し異なる。盗難の可能性はなくても、意図的な破壊の可能性は残っていると言えるのではないか」

「破壊？　つまりきみは、賊が芸術作品を星間輸送船ごと吹き飛ばそうとしている、アンチアートの連中ではないかと考えているのか、R・サエズリ？」

「その可能性も考えている。根拠だってないわけでもない。惑星ジェイの時刻管理サーバの不具合はどうだ。それに気付かずに着陸を試みていれば、われわれの惑星自転の予測が狂い、地表に激突していたかもしれない」

彼らの体内時計が不正確なのは、着陸目標の惑星との時刻同期が正しくとれていないためだった。星間輸送船が進む宇宙空間には、絶対的な時刻の指標はない。したがって星間輸送船は、母星からの通信をもとに、定期的に時刻の調整を行う。それは輸送船内のすべての機械も、ロボットも同様だった。もちろんロボットの体内時計もそこ

その精度を持ってはいるのだが、星間輸送では出発地と目的地との両方の時刻体系に適切に従う必要があり、その受信や計算には特別な装置が必要だった。

ところが、惑星ジェイの時刻管理サーバは、二人の航行中に大規模な不具合に見舞われていた。不具合の修正は徐々に進んでいたが、全規模の障害で着陸できなくなつた多くの輸送船が、いまでも惑星ジェイのまわりで順番待ちをしている状態だ。二人が乗り組む輸送船も、惑星ジェイの管制宙域に入り次第、時刻サーバとの通信をまず行う必要がある。そのため、輸送船もR・イナナキも、実用上はほぼ問題ないとはいえ、厳密には不正確な時刻しかわかつていない状態だった。

「われわれも他の船員も、サーバの不具合について報告を受けたし、報道番組も見た。たとえ賊が、アンチアート運動のためにまわりくどくも技術者を雇い、時刻管理サーバに大規模なクラッキングを仕掛けたのだとしても（あれが攻撃だという証拠もないが）、船長がそれに気づかず惑星に着陸しようとするなどありえない。だいいち、精確

な時刻同期は着陸の際のルーチンのひとつにもなっているじゃないか」

「たしかにそうだ」

R・サエズリはすぐに同意した。

「私は少しフレームを広げすぎているのかもしれない。人間の民間気質語で言えば、神経質というやつだ」

長身のR・イナナキがまた励ますように、相棒の肩に手を置く。二人は制服である濃紺のシャツを着ているが、R・イナナキのものには襟に一本の白の刺繍が入っており、これがコースガード内での階級の高さを表していた。

「きみは、これほど長い時刻同期の失敗を経験したことがなかったのだろう、R・サエズリ。だからささいなことにも敏感になり、遠い可能性まで重みづけしてシミュレートしてしまうのだ。私に言わせれば、星間輸送の警備を長くつづけていれば、こういうことはよくあることだよ」

R・サエズリはR・イナナキを振り返り、じっと見た。

「おそらく、そうなのだろう。記憶整理ルーチンのスケジュールの小さなずれが、私に混乱をもたらしているのかもしれない。ただ正確に言えば、他の持ち場というより、本当に心配なのは、私たちの乗るこの船だ。この船に攻撃があつたらと考えると、陽電子脳に非常な圧迫を覚える」

「おお、まさかきみは自己保身を考えているのか、R・サエズリ？ 自分の安全を他の持ち場の同僚たちよりも心配するというのなら、ロボット工学三原則、第三条への明示的インデクシングを再度行うべきだな」

R・イナナキの口調は冗談めいている。もちろん、彼らロボットが、ロボット工学三原則を忘れることはありえないし、それに反することもありえないからだ。ロボット工学三原則とはこうだ。

第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りではない。

第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

この原則は、正確には原則というよりは公理のようなものだ。つまり、彼らロボットは、この三原則に工学的に基づいた電子頭脳を設計されており、それに反して行動することはほとんど不可能に近い。ロボットのすべての行動は、この三原則から演繹できるような形で行われるのだ。また、この三原則に基づかない電子頭脳は、これまでのところ発明されていない。

この三原則に従えば、ロボットであるR・サエズリが、他の警備員の安全よりも、自己の安全を気にかけた行動をとる、ということはない。正確に言えば、行動に移さないかぎりのシミュレーションを行うことはできるが、他人の安全と自己の安全とを天秤にかければ、つねに前者が優先される。

「もちろん違う、R・イナナキ。私が案じているのは、自己の安全ではなく、この船に同時に乗り組んでいる、きみの安全だ」

R・サエズリは、自分の肩に置かれたR・イナナキの右手を、そつと取って握った。

ロボットがロボットの身を案じることは、ロボット工学三原則と整合しないわけではない。近年では、ロボットへの差別的な扱いを禁じる条約が多く、惑星に浸透しており、ロボット工学三原則も、それに呼応するようにして若干の変容を受けつつある。

人間への奴隷的服従を意味しかねない第二条は、工学的技術や哲学的技術の発展により、その影響力を弱めていたし、逆に第一条は、人間だけでなく他のロボットの危害

をも考慮するように拡張されようとしていた。

「きみは私の入社当時から、つねに上長として私を指導し、育成してくれた。いまや私の演算において、きみからコピーした方法をシミュレーションに加えない領域はない。それは人間によって初期にインプットされたデータと同様、いまの私の根幹をなしているように思う。そのきみが危険な目に合うようなことがあったらと思うと、私はつい、過剰な心配をしてしまうのだ」

「ふーむ！ ありがとうR・サエズリ。だがわれわれが真に心配すべきなのは、互いの安全よりも、まずは警備対象の安全だ。極端なことを言えば、この輸送船が攻撃されたら、われわれは『美そのもの』を抱えて船外へ飛び出すことも考慮すべきだろう。その際、どちらかが賊の溶断機に焼かれ、あるいは貨物コンテナを守って大気圏で燃え尽きようと、『美そのもの』がぶじであることが重要なのだ」

自分の身を捨てて人間ではなく芸術作品を守ることは、厳密には第三条に違反するの

だが、彼ら警備ロボットは、第一条を少し強められており、このような対応をとることもできた。彼らにとって、人間への危害とは、人間の特定の財産、すなわち今回は『美そのもの』への害も含むようになっていたのだ。

R・イナナキは自分の腕を組むと、R・サエズリから離れて壁際の位置に戻った。

R・サエズリの両腕は、R・イナナキの手を握っていたそのままの姿勢で止まっていた。天井の代替ナトリウム光が、『美そのもの』の入ったケースに悲しげな影を作る。「むしろこう考えるべきだ、R・サエズリ。きみのいうようにわれわれの方法が長年のユニット活動によって似通ってきているとすれば、われわれはある意味で同一の存在と言えなくもない。二人のロボットというより、むしろ一組のユニットと見るべきなのだ。万一の際には、あるいはそれをシミュレートする際には、私への危害はきみへの危害と同様、優先順位を低く考えることだ」

R・サエズリはしばらく黙って計算していたが、やがてうなずくと、R・イナナキと

は反対の壁際に戻った。

そのとき、貨物室のドア脇に据えつけられている映話機に、惑星ジェイからのプッシュ通知が入った。今回の展示会の責任者ナカノの声は、定期通信のときとは違いあわてている。

「R・イナナキ、『美そのもの』輸送船三隻中二隻が、たったいま爆破された。積荷も含め完全な消滅。そちらも十分に警戒せよ。R・イナナキ、『美そのもの』輸送船三隻中二隻が……」

ロボットたちは顔を見合わせると、映話機に駆け寄った。回線を開くと、船長のテセウスからの映話が優先度ゼロの最高位で割り込む。

「聞いたか、R・イナナキ。いまのところこの船の周辺に異常はない。念のため貨物室への外部回線をこれから遮断し、ガーネットを向かわせる。ブツの安全を確認しろ」ガーネットはこの船の美術品管理人だ。映話機に現れるテセウス船長の顔には、低温

の宇宙船内にはふさわしくない汗が浮かんでいる。

「了解。そちらも空域警戒をお願いします」

万が一のクラッキング回避のためだろう、外との回線が遮断され、同時にナカノから来ていたプッシュ通知はオフライン表示になった。特別に分厚い金属製のドアに鈍いノックの音。鋭敏なセンサを持つR・サエズリは、ガーネットの声をドア越しに聞きつけ、映話機を内線に切り替えた。ガーネットは輸送中の睡眠から目覚めたばかりらしく、薄紅色の入眠服をまとったままの映像が映し出された。顔を上に向けた奇妙な姿勢だが、これは貨物室のドアの外にある映話機が、小柄な彼女にとってはやや高い位置にあるためだ。

「ハイ、R・イナナキ、R・サエズリも。緊急事態ですけど、貨物室のドアはまだ開錠しないで。まずあなたたちが、ケースの中身を確認してください。品物の特徴データは出発前に受信していますね」

映話機を通じて、ガーネットは貨物室の中の様子を確認しているらしい。二人のロボットはそちらに見えるように配慮しながら、貨物室の奥に固定された灰色のケースに近寄って、複雑なロックを解除した。荷物に影響を与えないよう、計器類を手順どおりオフにしていく。やがてケースの緑の開錠ランプがともった。R・サエズリが蓋を開く。

「どう？ 『美そのもの』はある？」

ガーネットが外から不安げに問う。その予想は的中してしまった。

「ありません、ガーネット。『美そのもの』は消失しています」

美の鑑賞はいつだって深遠な経験をもたらしてくれるものですが、この芸術作品、その名も『美そのもの』の深奥を鑑賞することは、時空間の内側に位置するわたしたちにとって、きわめて難しいか、あるいは不可能とさえ言えるかもしれません。形而上学的挑戦に満ちた彫刻作品やパフォーマンスで知られるシンイチロ・イクタが今回取り組んだのは、芸術作品というものの本性にまつわる問題です。芸術作品が形而上学的に見て具体的な存在だという主流の学説に対し、イクタは具体的手法のみで抽象的対象を新たに作成したと宣言し、疑問を投げかけました。会場にはイクタの作成した具体物が並びますが、それらはすべて、抽象物である『美そのもの』の一つの例化物でしかないのです。イクタの試みは成功したのか、具体物を通して、私たちは抽象的存在者を幻視できるのでしょうか。ジェイ・クロッサ・タワーにて体験してください。

(ジェイ・アート・ドクメンタ、配布されなかったパンフレットより)

ときは三十一世紀。形而上学の黎明とされる古代ギリシャを除けば、この時代ほど人々が形而上学を身近なものとして意識したことはなかっただろう。この数百年の技術の発展により日常へと開かれた領域はあまりにも多く、人々はそれまでの直観が通じない世界のなかで、より明確な基本概念を求めた。自律行動し知性を持つロボット  
の存在は、人間以外の心や責任といった哲学的話題を現実の問題としたし、無限とも  
思える距離を移動する超空間航法の研究が進むのとともに、時間や空間の本性がいよ  
いよ切迫した問題として、人々の生活に影響を及ぼした。肉体の一部や全部を交換す  
る長寿は言うまでもなく、哲学的思索のための時間を作り出す。こうした時代にあつ  
ては、犯罪もまた、物質的被害のみならず、形而上学的な問題までも呼び込む形で変  
質していた。原則どおりに動くロボットを悪用した犯罪において、ロボットの責任は

問えるのか。もし空間と空間との連結がこれまで考えられてきたものとは異なるなら、私的空間への侵入を罪と呼ぶのは不適當かもしれない。肉体交換の普及により個人の肉体的性と社会的アイデンティティとの結びつきはますます弱まったが、性的暴行はいまも通常の暴行よりもおぞましい重罪とされ、その根拠は議論のまただ。犯罪、法、そして正義はいまや形而上学に支えられていると言っても過言ではなく、その執行にもまた、形而上学が必要だった。強靱な身体能力を備えた者や鋭い捜査能力を発揮する者に加え、刑事として新たな素質を見出されたのは、行為、様相、抽象者などの諸概念に通じ、正義の普遍妥当性を追究できるスペシャリストたちだった。

形而上学とは、この世界の基礎的なありかたを、統一的、整合的に理解しようとする学問のことである。非常に現代的だが、ある意味で古典的とも言える問題に、科学技術と論理的手法とを武器にして取り組み、犯罪と対峙する刑事たち。人々は彼らを、形而上学刑事と呼んだ。

自動通路の屋根越しに陽光が入り、ティロマは目を細めた。持っていた端末ごと手をかざす前に、相棒の9Bの巨体が左に少し動いて、日よけになってくれる。

「しかしながら、人間を殺傷するための武器の提供には、やはり同意できません、ティロマ。相手が機械や物品、もしくはロボットであれば、何の問題もないのですが」

身長8フィートほどもある9Bが、外骨格に埋まった首をかしげるさまは、見ている滑稽だった。9Bはヒューマノイドタイプのロボットだが、人間によく似たそのボディに、製造直後から強化外骨格を装着している。外骨格にはティロマの活動を支援するため、数々の武装や特殊機能が収納されているが、どれも殺傷能力というよりは、制圧力に重きを置いたものだ。ロボットは人間には危害を加えられない——ロボット工学三原則の第一条が、9Bの武装を制約していた。

ティロマは素っ気ないパレットでまとめた黒髪をかきながら、9Bの困り顔を見上

げるのをやめ、自動通路の前方に向き直った。目的地まではまだ少しかかる。

「じゃあ、私がおのへの路地裏で、バンダナ・ギャングに締め上げられても、あなた黙って冷蔵庫みたいに立ってる？ 立ってたい？」

たしかに9Bは、手足が生えたライトイエローの冷蔵庫によく似ていた。人間ならば骨格の関係上、上に伸びたり横に太ることは多くても、奥行きには限界がある。しかし9Bの外骨格は、ほとんど9Bを収める箱と言ってもいいぐらいの分厚さだった。

何であれ小型化が進む三十一世紀のこの時代にあっても、冷蔵庫は中に一定量の冷凍食料を収める都合上、一定の大きさが必要なのだった。体積を数十分の一に抑える圧縮冷凍の技術は、解凍後のサイズの安定に難があり、工業用あるいは凶悪犯の禁固刑ぐらいにしか使われていない。

「まさか！ あなたは私のよき友人です、テイロマ。放っておくわけがない。それに、もし襲われたのがあなたでなかったとしても、私は人間への危害を見過ごすことはで

きません。ギャングはすべて制圧されるでしょう。ただ、それには殺傷用の武器は、威力が過剰すぎる、と言っているのです」

「バンダナ・ギャングが武装してたらどう？ 伝導性制御アーマは電気ショックを弾きかえず、爆薬で吹っ飛ばす以外に手はない。もちろん、それで何人か死ぬかもしれないけど、他人に危害を加えようとしてるやつらに、それぐらいのリスクは負わせるべきなんじゃない？」

テイロマは語気を強めた。実際、いま二人がいる惑星ジェイの治安は、他の星に比べて特別によりわけではない。すべての路地裏でというわけではないが、町はずれに不用意に足を踏み入れれば、物理スリもしくは電磁スリの被害にあうし、高級専門店が立ち並ぶこのエリアでも、現地警察機構のホヴァ・カーがサイレンを鳴らしていることは少なくなかった。惑星開拓直後の混乱期の遺物として、危険な武器が簡単に手に入ってしまうのも問題だ。テイロマが言うのはあながち脅しというわけでもなかった。

「だいたい、そういうとき使わなかったら、あなたのコレは何の役に立つの」

ティロマは黒い合成皮革ブーツのかかとで、後ろにいる9Bの足を蹴った。象を思わせるほど太い二本の脚部には、9Bの最大の武器が隠されていたが、自律歩行モードではそうとはわからない。金属製の外骨格が間抜けな音を立てた。

「ふうむ、ですから、私はこのボディを呪わしく思っています。目的論的に考えるならば、私が果たすべき機能の一つは、明らかにこの組み込み式の武器を使った攻撃です。これに他の用途はありません。しかし、このことは私のロボットとしての原理と矛盾するように思います」

ティロマたちにとってこの種の問答は初めてというわけではなかった。犯罪の現場に居合わせる人が多い二人としては、それが本望ではないにせよ、武装的対決は避けて通れない問題だ。多くの場合、9Bの適切な支援によって事態を切り抜けてきたが、前回の任務では、9Bの武装に頼れなかったティロマは完全武装したバンダナ・ギャ

ングにひどい目にあわされ、泥まみれで脱出するはめになったのだった。テイロマはそのとき以来の繕いあとが目立つジャケットに、もてあそんでいた端末をしまった。現地の警察署に寄ってから、テイロマたちは自動通路をえんえんと乗り継いできたのだが、もう目的地は近く、ガイド情報を見る必要もない。

「テイロマ、前回の任務のことでは、あなたに危害が及んだことを大変心苦しく思っています。潜入前の相談で、私が武器として機能することに同意していれば、連中をたやすく制圧できたでしょうから」

9 Bの表情が苦しみに満ちたパターンに固定される。これは9 Bの陽電子脳が計算的に圧迫されたときのサインで、彼はテイロマに危害が及んだことを思い返し、第一条とのあいだに矛盾を覚えているのだ。計算量が足りなくなるため、表情筋はスタンブ的な固定パターンを作らざるをえないが、人間で言えばそれは苦しみだ。ロボット工学三原則を擁する9 Bにとって、相棒のテイロマを保護できないことは問題だが、犯

罪者といえど人間、それを殺傷することもまた問題だ。

「済んだことはいいんだけど」

そう言うティロマの声色にも陰が混じる。反対側の自動通路を通る現地の若いベビィシッタが、無意識にか連れの子どもの手を引いた。ティロマたちは惑星ジェイではあまり使われない言葉で話しているので、中身が通じたわけではないようだが、目つきの鋭いティロマがあからさまにいらだっている様子や、瀟洒なファッション店が続く街並みには似合わない9Bの威容に、気圧されたのかもしれないしなかった。

「まあそもそも、見つかったちゃって口八丁で切り抜けれない私にも責任があるわけだし、ドンパチに甘えてばっかりなのもどうかって感じだわな」

すねた言いかたに気付いてか気付かずか、9Bが身をかがめ、ティロマに視線を合わせようとした。

「今日は少し感情の起伏が激しいですね。このことはまた別の機会に話しましょう。」

枝刈りが必要ですか？」

枝刈りとは、9 Bのもう一つの重要な機能だった。ブロードバンド・ブレインブースタ・バイ・バイナリブランディング、それが外骨格におさまっている9 Bの、正式な商品名である。二分枝刈り法による広域的頭脳支援、それは、使用した人間の脳皮質をモニタして干渉し、無用な感情のループに陥る前にその枝をいわば刈り落とすことで、非人間的なほどに透徹した、最短経路の思考を可能にする技術だ。たとえば、重要な商談に失敗するかもという不安があれば、人間は繰り返し不安をシミュレーションしてしまう。シミュレーションにはよい面もあるが、その感情ループから抜け出せず、他の作業に手がつかなくなってしまうことも多い。戦場や犯罪の現場では、ことはもっと深刻だ。一瞬の逡巡が死につながる場所で、いかにその逡巡の影響を消し、集中力を高めるか。かつては薬剤や手術により、そうした感情をまるごと消去する方法も模索されたが、この時代では感情そのものが問題ではなく、思考がそれによつ

て圧迫されてしまうのが問題なのだと理解されている。そこでブレインブースタは、そうした袋小路的思考を検知し、計算力を生かして肩代わりし、警告する。使用者は何時間も同じことで悩まなくてよくなり、生産的な思考だけに集中できる。雑念を取り除くブレインブースタは、それ自体が人間的思考力を持つわけではないが、思考の効率化にはうってつけなのだ。最近では裕福な企業を中心に、社員がここぞという正念場で用いる、据え置き型のブレインブースタが広まっている。

9 Bはロボットだがブレインブースタの機能を持っていて、テイロマとは脳内に埋め込まれたプラグで無線直結していた。テイロマは必要に応じて、特別な装置なしで枝刈りの支援を受けることができる。古典的な二分探索法を利用している旧式とはいえ、移動可能なほどの小型サイズで、それもロボットに組み込まれたタイプはまだ珍しく、テイロマが個人で手に入れることはできなかつただろう。ブレインブースタをはじめとした組織的支援によってテイロマは、凄惨な現場に臨んでも、トラウマ的体

験にさいなまれることなく任務を遂行してこられたのだが、通常時はそれを遮断していた。

「枝刈りはいらぬ。いまはいらいらしてたい気分だから。それと」

次の自動通路に乗り換えながら、ティロマは後ろを向いて9Bを小突いた。

「やっぱりいま話そう。私の主張は、任意の人間に対して、任意の目的で、あなたの武装を提供すべきって形をしてない。私という特定の人物に対して、私を守るという目的で、という限定をかけた主張さえできれば、私としてはオーケー」

「どうやら、何か論証があるようですね！」

巨体を自動通路にそつと乗せながら、9Bはライムイエローの肩パッドをふるわせて、大げさに喜びの態度をとる。9Bはティロマの相棒だけあって、論証、それも哲学的な論証が大好物なのだ。

「いまの限定で、私の主張は行為のレベルでの普遍妥当性を保つ必要がなくなつた。

したがって、倫理的立場という根本的な部分に立ち戻って、あなたがすべきことを検討しなおす動機が出てくる」

ティロマは形而上学に関し専門的な教育を受けており、いまの仕事にも大いに役立っていた。そしてすぐれた形而上学者は、倫理学や知識の哲学、美学といった隣接分野にも、それなりに通暁しているものだ。ティロマには9Bを説得する自信があったし、論証を検討することで自分の思考が集中し、9Bや自分自身に対するいらだちが消えていく実感もあった。

「同じ帰結を持つ同じ行為でも、その目的が異なれば、別の行為タイプのもとで記述しなおせるか、あるいは少なくとも別の倫理的評価を割り振れるというのは、私たちの実践に照らしてもっともらしい。たとえ万人に対して適用できる基準でなくても、たとえば特別に親密な相手にだけ適用できる倫理的基準というのがあるよね？」

9Bが少しうなつてから、片方の手を自動通路の手すりの上で、素早く振り下ろした。

これは論理学上のハンドシグナルで、論証を最後まで続けるように促すものだ。いまは反論を差し挟むより、論証構造の全体を知りたいというところだろう。テイロマはうなずいて続けた。

「私はあなたと長いこといっしょにいるし、相棒として特別な配慮をしあうべき。それなら、私が危険なときには、他の人間への危害よりも優先して助けるべきでしょう。そこでそうせずに、私を他の人間と同じようにカウントして、危害が及ぶ身体の個数だけを基準に客観的立場から判断を下すことは、冷酷とのそしりを免れない、非道徳的な態度だと私は思う」

「あなたを助けるために、大勢の生命を危険にさらすことになったとしてもでしょうか？」

「そうね。少なくとも、不特定の間人ひとり優先した場合と、私という人間を優先した場合とで、道徳的評価が異なることは認められるんじゃない？ もしそうなら、

あなたは私への危害を、犯罪者への危害よりも重みづけして考え、正当防衛の際には私に武器を提供する理由がある」

「ふーむ！」

9Bの表情が再び固定される。腕を頭の後ろで組むハンドシグナルを見るに、さまざまなシミュレーションに計算資源を使い、テイロマの提案が合理的行為を導くかどうかを検討しているのだろう。

「あ、着いた。そこで降りるから、待ってるあいだ考えといて。中で回線切ると思うから、なんかあったら物理コンタクトでよろしく」

自動通路のとぎれた箇所はバスターミナルになっていて、中型バスが二人のすぐ脇をゆっくりと入ってきた。ホヴァ・カー特有の排気は人体に有害ではないが極度に乾燥しており、テイロマは翡翠色の目をしばたかせる。ターミナルに面した小さなビルから連れだって出てくる富裕階級の者たちをかわして、二人は逆にそこへ入った。

二人の入ったビルは、高級エステティック・フランチャイズである「AAA」の、惑星ジェイ旗艦店。人間本性から生じる美しさを育み、さまざまな美の理論のもとで癒しいたわることをモットーとして、銀河系から集められた多様な美容健康法を施術するこの店に、今回のターゲットは勤めていた。ティロマたちが内偵を進める今回のターゲットは、分析美学を使いこなすセラピスト、言うなれば分析美学エステティシャンである。

感じのいい受付の青年に案内され、AAAの五階にある施術室のひとつに通された。ティロマは、薄い水色に統一された開放感のある部屋で、問診シートにゆったりと回答していった。9Bは二階のロビーで待っているはずだが、ブレインブースタとの脳内直結は切っているため、いまの様子はわからない。部屋の天井から注がれる光は、惑星ジェイのややまぶしすぎる陽光ではなく、といって不自然な平板さもない人工陽光だ。部屋の施術ベッドは人体にフィットするカーヴを描いていて、寝そべっているとも座っているともつかない姿勢が妙に心地よく、スタイラスを操る指も思わずとろとろとしてしまう。まだ目的の人物は現れていないが、エステを予約した時刻を考えれば、もうすぐ姿を見せるはずだった。AAAの「分析美学コース」は人気で、ネットから予約をとるにもひと苦労だったが、おかげで今日の予約日までのあいだに、ティロマたちはじつくりとターゲットの過去を洗うことができた。

ターゲットの名前はヘリンという。ヘリンはこの惑星ジェイで生まれた。学問水準の高い惑星に単身で移住し、分析美学を専門にして十年弱の学究生活を送ったあと、平凡な成果と広範な語学力とを手土産に、きょうだいのいる惑星ジェイに戻ってきて、高級エステティック・フランチャイズAAAの門を叩いたらしい。最初はAAAの美術品担当部門に配属されたようだが、学究よりも人間へのリラクゼーションのわざに天性があつたのか、いまでは「分析美学コース」担当のなかでも人気のエステティシャンのひとりとなっており、汎銀河クチコミポータルの情報では、おおむね好意的な評価がつけられていた。

分析美学とは、美しいと感じるといふ経験をはじめとした、味わうことそのものに内在的価値のある経験全般について、その内奥を反省し、また、隣接分野として発達した形而上学の道具立てを用いて、統一的に記述し議論していく学問領域のことである。ガ惑星の大赤班を目の当たりにして畏敬の念に打たれるとき、その経験はテラ

フォーミング・マシンの排ガス雲（ちよつと見には区別がつかない）を見るのとどこが違い、どこが似ているのか。人間の手わざになる芸術作品は、正確には何を作り出し、それと接したとき人間は、あるいは他の種類の知性はどのような経験をしているのか、それをどう記述すべきか。この数百年のうちに、人々はかつて想像だにしなければよくなたぐいのことを次々と経験することになり、その感性や情動を記述するなかで立ち現れたいくつもの美学的パラドクスを前にして、分析美学はまたとない活況を呈していた。

AAAをはじめとした美容業界も、分析美学の発展と無縁ではなかった。人間の美とは、芸術作品の美と本質的に同じものなのか、異なるものなのか。文化集団ごとに大きく異なるように見える人間の美を、統一的に表現し施術する基準はあるのか、あるとしたらそれはなにか。美についてのさまざまな理論をバックグラウンドとして施術を行うことは、この時代の美容業界では当然視されていたが、なかでも分析美学の

精髓を応用したエステコースが、AAAの「分析美学コース」だった。

ヘリンは、学問としての分析美学の魅力にもいまだに取りつかれつづけているらしく、人間を癒やし美を引き出すエステティシャンとなったあとも、ネット美学者として匿名で活動していることが突き止められている。そこから推定された現在のヘリンの能力をもとに、テイロマたちを監督する人事エキスパートシステムが下した判断は「適性あり」。テイロマが形而上学を生かすのと同様、ヘリンにも犯罪に関し、分析美学を生かした活躍の場を用意できる、とのことだった。そこでテイロマは、平たく言えばヘリンをヘッドハントするため、視察に派遣されていたのである。

波打ち際を思わせるやわらかいムードの環境音や、部屋を漂うほのかな柑橘類の香りが落ち着きを誘い、テイロマはそれだけで久しぶりに安らぎを覚えていた。外で来ていたジャケットも、いまは脱衣ケースの中に入れて、寝間着よりもずっと肌ざわりのいいセラピーガウンだけが、テイロマを適温に包んでいる。9Bが行う感情の

枝刈りは、思考の妨げにこそさせないものの悪感情を消してしまうわけではないため、ことに9Bとの接続を切った直後などは、どっと疲れが押し寄せることもあった。枝刈りを日常生活では拒否することが多いのも、それが理由である。だがここでの癒やしは、それとは質の異なるもので、ティロマは退屈することもなく、ヘリンの入室を待った。

「失礼します、お待たせいたしました。ああ、聞き入っていらしたのでですね」  
よく通る明るい声。いつの間に関目閉じてしまっていたのだろうか、ティロマがあわてて体を起こすと、滑らかな物理カーテンを開けて、小柄な人間が入ってくる場所だった。AAAの予約サイトにあった立体写真と同じ、細めの目にゆったりした笑顔。施術道具を積んだカートを操作する手は、しなやかそうだがふっくらとしており、マッサージやリンパドレナーージュといった肉体的セラピーには最適と言えた。

「静かな波の音でしょう、ふっと出かけたくなりますよね。これは、辺境惑星の浜辺

に置いたマイクから、じかに中継しているものなんです」

「そう、なんていうか、無心に聞いてられる音だなんて思ってたけど。天然の波をそのまま流してるの？」

テイロマが差し出した問診シートを施術カートにセットしながら、相手は答える。

「はい、人間の制作的意図が入っていない、ピュアな音を目指しています。音を通して、惑星の静穏さを感じとり、没入していただけるように。わたくし、本日テイロマさんを担当いたします、ヘリンでございます」

「よろしく……」

テイロマはここで、「分析美学コース」がすでに始まっていたことに気付いた。機械的装置を通過して発信される音は、単なる音波ではなく、辺境惑星の波打ち際という内容を持っている。それを耳にすることは、まったく同じ波形だが人工生成された音を聞くのとは違って、惑星の静穏さなどの性質にアクセスし、それを美的に味わうこと

を意味していた。ヘリンはそれを言っているのだ。

論理的手法に基づく形而上学の発展が旧来の美学に大きな影響を与え、分析美学と呼ばれる潮流が発生したのは、二十世紀の初頭と言われる。その後、ときに感受性の冷たい解剖とさげすまれることもありながら、科学的知見も着実に組み入れて真摯に美学的問題に取り組みつづけた分析美学は、この数百年の技術的変革を受けて一気に花開き、民間への応用が進んだ。A A Aのような一流店以外にも、分析美学を美容に取り入れたプログラムを誇るエステティックは多かつたし、工業製品や仮想的インタフェースのデザインを理論面で支えているのも、日常的体験を丁寧に体系化して記述することに長けた機械分析美学だった。

マイクロマシンによる体内洗浄がひととおり終わり、いまティロマは、滑るような着心地のセラピーガウンをはだけた格好で、肩の部分にヘリンの指圧トリートメント

を受けていた。

「なかなか、しっかり鍛えてらっしゃる感じですね。スポーツですか？」

「えーと……仕事柄ね……」

これまでの人生でエステとは縁遠かったティロマは、痛みを感じるほどのマッサージを受けたのは初めてで、つい数分前まではひるんでいたが、いまでは指圧の一押しごとに眉根を寄せながらも、ヘリンと会話できるほどにリラックスしていた。

「お仕事ですか。どうですか、最近、お仕事でうまくいったとか、何か充実した感じになったことってありますか？　そういったことも、それ自体でひとに活力を与えてくれる、美の源泉なんです」

「いやあ……なかなかね。スカッとすることなんて、そうそうないよ……刑事なんて  
商売はね……」

痛みとも快感とも記述できる感覚の波にじっと耐えながら、ティロマはとぎれとぎれ

に続けた。ヘリンはティロマの背後にまわっているため、目で様子を捉えることはできないが、ティロマは最前から、ヘリンの反応を探りつづけていた。ここに来た目的は己の美を磨くことではなく、ヘリンの分析美学エステティシャンとしての能力を見極めることなのだ。だがここまでのところ、ティロマは完全に相手のペースに飲まれており、インタビューをうまく遂行できているとは言えなかった。

分析美学コースの特徴は、セラピストが客の悩みや経験を聞き出し、そこに分析学的見地からの意味づけや捉えなおしを行うところにあつた。美的な経験は、ある意味では日常にあふれているが、人々はそれを体系化して関連づけることなく暮らすことが大半なので、ときに無意識の混乱や衝突が生じ、心に負担をかける。それをすくいあげ、客とともに整理をしていくことで、客自身が自らの人生を好ましいものとして把握できるようにするのが、分析美学エステティシャンの手練なのだつた。

そのかぎりでは、ヘリンは評判どおり、優れた分析美学エステティシャンと言えた。

むかしテイロマは、共同生活者が一編の詩を残して蒸発するという苦い経験をしたのだが、会話の流れでぼつりともらした言葉を手がかりに、ヘリンは制作者の意図に必ずしもこだわらない詩の解釈の整合性を提示した。それは当時のテイロマが捨て去った解釈でもあったが、ヘリンが近年の分析美学の展開に基づいて再記述をしてくれたことで新たな観点が生まれ、テイロマにも長年の重しを解き放つような活力が戻っていた。

だがこれはテイロマにとって個人的なセラピーではない。テイロマは自らの身分を餌にして、ヘリンの能力を図るテストを用意していた。

ヘリンが天然海藻エキスを浸みこませたタオルをテイロマの首筋にあてがって、軽く浮いた汗をぬぐってくれる。ホットストーンによる刺激とマッサージとで、血行がずいぶんよくなっているのが、テイロマ自身にも感じられた。

「刑事さんでしたか、道理で先ほどから、鋭いかただなあと。もしかして、有名な事

件の担当だったり？」

「うーん、ハイ。パウエーブドラマで特集されるようなやつは、まだ扱ったことないな。形而上学刑事って言ってるわかる？ 私はあれだから、人並みに鍛えちやいるけど荒事は得意じゃないし、あんまり派手な事件には関わってない」

するとヘリンの声色が少し高くなった。

「形而上学刑事！ 格好いいなあ、本物に会うのははじめてです。劇なんかだと、たまに出てまいりますけど」

「たいてい、イヤミな引き立て役だね。最後にはたたき上げの刑事の暴力と当て推量が炸裂」

ティロマは半分は本気の悪意をこめた皮肉で返した。

「炸裂、ははは。へえ」

ヘリンの合いの手の調子がいい加減になったのは、次の施術の準備に集中したからか、

それとも形而上学刑事と聞いて職業上以外の関心をそそられたからか。匿名で参加していると思しき哲学フォーラムでは、ヘリンは分析美学に加えて形而上学の論題にも顔を出しており、形而上学刑事が関わったいくつかの事件についても関心を持っているようだった。

「もう形而上学刑事されて長いんですか？ あ、上体を伸ばすマッサージをしますの  
で、そのままの姿勢で」

ヘリンは後ろからテイロロマの腕をとり、軽く引つ張りながらきいた。

「そうね……でもまだまだ。そうだ……最近、扱ってる事件が……美術品の盗難なん  
だけど。分析美学エステイシヤンの感想も、きいてみたいかな」

「えっ？ 美術品ですか、多いみたいですね最近。この前も、この星のジェイ・クロツ  
サ・タワーであったアートイベントが、盗難で中止になったらしくて。わたくしも楽  
しみにしてましたので、あれは残念でした」

『美そのもの』でしょう？ それ、その話。あれが私の担当だから」

上気した体を冷ます美容クリームを丁寧ティロマの肌にすりこみながら、ヘリンはうなづいた。

「つまり、美術品管理人のかたとロボット警備員の方々が嚴重に管理していた貨物室のなかから、『美そのもの』は盗み出されてしまった、と。イベント中止の経緯って、作家のイクタさんからも、主催の広報でも特に説明されておりませんでしたけど、そういうことがあったんですね」

ティロマはこのエステの秘密厳守の規則に念押ししたうえで、TSU5号に起きた盗難事件の概要を話していた。奇妙な状況で起きたとはいえ、この事件は社会的関心が高いものではなく、報道もほとんどされていない。警備会社コースガードが、会社の目玉となっている警備ロボットに悪評がたつのを防ぐためか、圧力をかけているふし

もあつた。

「でも、他の輸送船はどうなったんでしようか？ 時刻サーバがめっちゃくちゃになつていたときも、輸送船が襲撃されたつていうニュースも耳にしておりませんが」

「実際なかつたからね。TSU5号には、他の輸送船が全滅したつていう知らせが入つたけど、そんな事実はない。残りの二隻はちゃんと着陸してるし、積荷もぶじだった。

後から調べた結果、TSU5号に入ったのはニセの通信だった。何者かがTSU5号の認証キーをコピーして、正規のルート経由で偽造通信を送つたらしい。通信に使われていた声も、公開されてるスピーチから作つた合成」

「じゃあ、盗難犯人が何かの目的で、偽造通信を送つて、緊急事態を演出したということでしょうか」

美容クリームをつけた筆状ブラシの動きが止まる。ヘリンは遠くの音を聞くようにして、考えこんでいるふうだった。

「でしょうね。でもTSU5号の人間をパニックにさせたとしても、そのどさくさに紛れて『美そのもの』を盗むってわけにはいかない。二体のロボットが『美そのもの』の消失を確認したとき、貨物室はまだロックされてた」

「最初からケースが空だったってことはありませんか？」

ヘリンが熱心に聞く。

「ありえない。そこがこの事件のなぞめいてるところ。ケースについてた計器の記録では、警備ロボットたちがロックを外すために計器を止める直前まで、中身に異常は見られなかった。輸送元の美術館で梱包したときのまま、質量センサや気圧センサも、すべて正常値」

「ええっ、そうすると、ロボット警備員の方々がケースを開けるまでは、『美そのもの』はそこにあった。でもケースを開けたとたん、消えてしまった。なんとなく、量子力学のたとえ話に出てくる猫みたいですね」

テイロマはややがっかりして、施術ベッドから上体を起こした。

「まさか。シュレディンガーの猫よろしく、ロボットの観測によって『美そのもの』の状態が決定したってこと？ 完全にありえないとは言えないけど、梱包ケースに量子論的特徴はついてないし、『美そのもの』はマクロレベルの存在者だよ。そんなのがオチだったらこの仕事やめるわ」

「あはは、冗談です。仮に量子力学の何かが関わってたとしても、それを引き起こすマクロなメカニズムが明らかにならないかぎり、盗難事件の解決とは申せませんよね。でも、わたくしがあの猫だったら、生きてても箱が開いたとたん逃げ出すと思います  
が」

『美そのもの』が自律的に逃げ出した？ それは考えたことなかったけど」

シンイチロ・イクタの作品『美そのもの』は、個々の造形物としては、これといった特徴も、あるいは共通点もない。機械的ガラクタをつなぎあわせた人間大の塊と、炭

素結晶チューブからなる繊細な絵画的立体物の制作過程を映像で追った、それ自体はありふれた記録メディア、そしてTSU5号が運んでいたのは、数枚の天然繊維質を丸めた、ボールのような代物だった。ある意味では、それを連作アートと呼ぶこともできるかもしれないが、イクタは個々の造形物に関しては、単体では芸術作品ではないと主張していた。

イクタは、これらのばらばらな造形物がすべて、彼の作り出した抽象的芸術作品『美そのもの』の一例化物だと主張した。抽象物とは、特定の時空的位置を持つと記述することができないものことだ。たとえば、惑星ジェイはその公転周期によって宇宙のなかで特定の位置を持つが、「惑星ジェイが六坂トンの質量を持つ」という命題は抽象物であり、宇宙のどこに存在するとも言えない。また、惑星ジェイは岩石惑星だが、岩石惑星であるという性質は、他のいくつもの惑星にも共有される性質であり、その点でどの惑星の位置にあるとも言えない抽象物だ。この場合、岩石惑星であるという

性質を惑星ジェイが一例として具体化しており、惑星ジェイは岩石惑星性の例化物である、と言われる。イクタは、自分が作り出した芸術作品は個々の造形物ではなく、それが例化するところの、抽象物としての『美そのもの』のほうだ、と述べたのだ。三つの造形物は、惑星ジェイへの輸送前には別々の惑星で展示されていたが、輸送前の各惑星での展示でも、造形物の説明コードは『美そのもの』の一例化物」となっており、そのような形而上学的見方が推奨されていた。

テイロマはTSU5号の積み荷の特徴を簡単に説明した。

「TSU5号が運んでいたものに、自力で逃げ出せるような可動部はなかった。輸送元の美術館での梱包時の記録も残ってるけど、あれは本質的には、樹脂で固めた布と言っていると思う。蹴飛ばして転がすことはできるけど、自分で転がるような芸当は無理」

ヘリンは筆状ブラシの先を宙に向けて、なかば独り言のようにつぶやいた。ヘリンを

上に乗せたまま、移動椅子がプログラムされたとおりに動き、施術ベッドの左側から右側にまわる。

「宇宙船の揺れで、ケースを開けた瞬間にどこかに飛び出したとか」

「ありえないかな。美術品輸送についてはいろいろと繊細な業界ルールがあつて、品物の固定もそのひとつ。万が一動いたり歪んだりしちゃった場合、元に戻せる者は限られてるから」

「そうですねえ、AAAでもときどき、人間だけじゃなくて美術品のトリートメントを担当させていただくこともございますが、そういうのを運ぶときには固着ラックをスプレーして、ほとんど氷漬けみたいな状態にいたしますね。そうなたらもう勝手には動きません」

ヘリンは柔らかい手のひらを曲げて左右に振り、スプレーする動作を見せた。

「ケースが開いてから逃げ出したんじゃないかとなく、閉じてるあいだにワープしたっていう

ことはありますか？ 超空間移動」

「うーん、私も原理について詳しく知っているわけじゃないけど、それは無理。超空間移動には大がかりな装置が必要だし、中型宇宙船サイズよりも小さいものを、それもケースの中のものだけ引き抜くなんてことが実現できたら、工学学会で表彰されるレベルよ」

「そうなんですか」

ワープもだめか、とヘリンがつぶやくので、ティロマはだんだんじれてきた。せつかく苦勞して、ヘリンが興味を持ちそうな未解決事件の情報を仕入れてきたのに、ヘリンは分析美的アプローチをとるわけでもなく、工学上の可能性をうんぬんしている。機械工学的解決が可能であれば、ティロマの側に専門家は多い。そういった手段は、ティロマ自身やエキスパートシステムが、すでに検討済みであった。この未解決事件を通じてヘリンの分析美学エステティシャンとしての素質を測るには、それらは脇道

なのだ。9 Bはいないが、ティロマはさつさと「枝刈り」を済ませたかった。

「ロボット警備員の方々が確認する前に、箱の中身をすり替えるチャンスはあったんでしょうか」

「難しいと思う。さつきも言ったけど、計器はずっと正常に作動していたし、電子ロックの記録上も、惑星上で梱包されてから警備ロボットが開錠するまで、ケースが開いた痕跡は一切ない。TSU5号の航行中は、貨物室の扉も開けないようになっていたぐらいだから」

「そうですか。盗難がわかったあとはいかがでしょう？ そのときは、貨物室を開けて中を改めたんですよね？」

ティロマは、角度を変えて食い下がるヘリンの細い目を、挑発的に見つめ返した。

「警備ロボットが消失を宣言したあと、まず外にいた美術品管理人が、貨物室に入っ  
てケースや、そのまわりを確認したらしい。もし盗難ということになれば、セキュリティ

テイ会社の責任も当然あるけど、管理人の責任だって重大だから。その確認が終わるまで、他の人間やロボットは、貨物室には入れなかった」

「そういうことでしたら、逆に申しますと、その管理人のかたにはチャンスがありそうですね。何らかの方法で、ロボット警備員のお一人にだけ『美そのもの』がなくなると判断させ、貨物室に入ってから自分で盗み出す」

「そう。当局もそうにらんでる。窃盗犯は美術品管理人のガーネット。惑星ジェイに到着したときの身体検査では何も出なかったから、盗品の始末については不明だけど、もしかしたら着陸まえに焼却したか溶解したのかも。美術品の闇での故買に通じていれば、盗品そのものを消滅させたとしても、いろいろと金儲けの手段はあるからね」

「巧妙な手口が、いろいろとあるようですね。わたくし、むかし大学で、保険金を使った美術品商売のテクニクを聞いたことがございます。わたくしとしては、芸術作品というのは、出会ったが最後その経験を汲みつくすまで離れがたいような代物と考え

てますので、投機や転売というのには、なかなかなじめませんけれども」

「刑事が追いかける連中つてのは、即物的で散文的なのばかりよ」

ティロマは鼻を鳴らしてみせた。ヘリンはティロマの右側の肌に、美容クリームを塗りこむ作業を再開したが、考えはまだ事件のことにあるようだ。

「それで、そのガーネットさんというかたは、容疑者として監視されているのでしょうか？」

「残念ながら、翌日に行方をくらましました。警察としては大失態ね。しかも、ガーネットの過去をよく洗うと、検挙されていないだけで、複数の盗品売買、あるいは盗品売買詐欺に関係している可能性が出てきた」

「どうやら、犯人はそこかたで決まりのようですね」

「おおかたの意見はそうね。ただ、この件では警察も捜索してるけど、ガーネットに詐欺で一杯喰わされた犯罪組織も動いてるらしい。もしかしたらそつちに先に見つ

かって、もう消されてしまった可能性まである」

変わらず室内に流れる環境音に紛れて、ヘリンが小さく息を吸った。

「恐ろしいことですね。もし犯人なら、ちゃんとテイロマさんに保護していただいて、法律で決められたつぐないをしてほしいものです。そうすれば、どうやって『美そのもの』を盗み出したかも、証言してくださいさるでしょうから」

「というと、あなたでも、『美そのもの』が消えた、あるいは警備ロボットに消えたように見えた理由は、想像つかない？」

そうですねえ、とまたヘリンは考えこむ。しばらく、筆状ブラシをクリームつぼの中でかき回す音と、辺境惑星の波音とだけが、室内を支配した。

と突然、波音がすさまじいノイズにとつてかわった。テイロマは思わず身をすくませる。ヘリンが即座に施術カートのスイッチを操作し、環境音をオフにした。

「すみません、テイロマさん、機械の故障かと存じます」

立ち上がって詫びるヘリンを手で制し、ティロマは階下の様子に耳をすませた。重い振動。破砕音、そして銃声、放電音だ。

「このビル、銀行かギャングの事務所でも入ってる？」

「いえ、五階まですべて、わたくしどもAAAのテナントですが。下で何かあったようです。係の者が確認しているはずですので、このままお待ちいただけますか」

一礼して部屋を出ようとするヘリンを、ティロマはベッドから飛び降りて引きとめた。

「あなたもここにいなさい。私のほうも、相棒が状況を確認して、報告に来るはず」

重たい足音が非人間的な速度で階段を駆け上がり、こちらへ接近してくるのを、ティロマは聞きつけていた。その足音は、高級布地でできた物理カーテンの前で止まる。

間もなく、9Bのライムイエローのボディの上半身が、隣にある別の施術室から、壁を破って現れた。

「失礼、正しい入室方法があれば教えてください、こちらを通るほうが低コストに思

えました。テイロマ、見てわかると思いますが、あなたに物理コンタクトを要求します」

「オーケー、何があった？」

「武装集団がこのビルを襲撃しています。第一陣は警備員が応戦していますが、二分以内に地上から第二陣が来ます。傍受できた通信から判断して、武装集団の目的は何かのターゲット人物の連行で、そのために殺傷をいとわない様子です」

テイロマはベッド下の脱衣かごから黒いジャケットをとると、セラピーガウンの上に直接羽織った。壁から生えた姿勢のままの9 Bが、意図を察して左腕を差し出す。腕を短く振り切り、ジャケットのひじを強くそこに当てると、黒かったジャケットの全体が一瞬にして白く硬化した。衝撃によって内部の結晶構造を変化させ、銃弾を跳ね返すようになる硬化ジャケットだ。

「競合他社さんかしらねえ。9 B、私の靴がないんだけど」

「私は持っていません、ティロマ。このフロアに来る前に脱ぐことになっていたはずです。ロッカーから検索しますか？」

「時間もなさそうね。サンダルでどこまでいけると思う？」

「鎮圧訓練のスコアのことであれば、四十パーセント以下に低下すると予測します」  
ティロマは首を振って、サンダルをつっかけた。裸足よりはましだ。あつけにとられているヘリンの小柄な肩に手を置いて、言い聞かせるように宣言する。

「私も出る。用事が済んでいない以上、ここを死守します」

「いえ、お客様の健康と美容をお預かりした以上、そういうことは……」

混乱した様子のヘリンを強引にベッドに座らせ、ティロマはきっぱりと言った。

「私は刑事で、市民の平和と安全を守るのが仕事だから。行くよ9B」

ほどこいていた髪をまとめながら、物理カーテンを開けて廊下に出ると、9Bも隣の施術室から出てきた。そこは最初から空室で、カーテンも開け放してあったようだ。

ティロマが入ったヒーリングスペースは廊下のもっとも奥にある。他の施術室でも、階下の様子を知って客がざわついているようだったが、ティロマたちは構わず走り抜け、窓まで寄った。

「あれがそう？ どこも物騒なもんね」

ティロマの見下ろした先では、自動実弾小銃で武装した人間が数体、非人間的な形状の戦闘機械を連れて、ビルの前のロータリーに徒歩で入ってきていた。全身を覆う兵装は、干からびた昆虫の殻を思わせる。

「はい。まずいですね、新手の連中は安価な伝導性制御アーマを着ています。警察機構の鎮圧に抵抗しやすいということで、この惑星のギャングのあいだでは人気の商品ですね」

「つまり本気で突っ込んでくる気なんだ。確認するけど、敵の目的はなんだと思う？ この建物に、だれか重要人物がいる？」

「わかりませんが、こうした高級エステに来店する客の中には、それなりに裕福な人物もいるでしょう。あるいは、私たち同様、転職をオファーしたい人材がいるのかもしれない」

「とんだヘッドハンティングだ。用がなければ見逃す手もあるけど、今はこっちが先客、排除しましょう」

「殺害の危険なく鎮圧するには、電磁パルス銃では不十分です。接近して肉弾的解決をとり、武装解除することを提案します」

電磁パルス銃は照射した箇所に電流を発生させ、人間の神経を麻痺させたり、ロボットや機械の調子を狂わせたりする。だが、絶縁性とアーシングとを巧妙に組み合わせた伝導性制御アーマに対しては、電流は効果がない。

9Bが外骨格に格納していたヘルメットと、小型銃とを取り出して、ティロマに渡した。銃の基本モードは電磁パルス銃だが、殺傷力の高い熱線モードに切り替えるこ

ともできる。

「肉弾的解決？ はあ、いきなり熱線で狙い撃ちしたらだめなわけ」

「ここから観察するかぎり、敵のうち少なくとも二名は人間です。残りについては同形状のアーマを装着した人型戦闘機械の可能性もありますが、どちらにせよ、私はロボットですので、人間に殺傷のような重大な危害が及ぶことを、看過するわけにはいきません。熱線モードの使用は控えてください」

ロボット工学三原則の第一条だ！ 「ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。」AAAに到着するまでのあいだも、ティロマたちはこの原則と戦闘とについて、議論をしたはずだったが、9Bは最終的に納得しなかったようだ。ティロマはうんざりしながらヘルメットを被った。ゴーグル部分の内側で、近距離通信により9Bからの情報が読み出され、視界に表示されている。

「オーケー、ではここから一気に地上に降りて奇襲をかける。重力支援」

「合計二十分の支援が可能です。いつでもどうぞ」

惑星ジェイは密度のある岩石惑星なので、五階から飛び降りれば当然、重力の作用により、ロータリーの地べたに叩きつけられて命を落とすことになる。だがこの時代では、人類は限定的にだが、重力を操作するすべを知っていた。冷蔵庫ほどもある9Bの外骨格には、重力子を操作してティロマの活動を支援するシステムが組み込まれているのだ。落下の衝撃は軽減され、走つての移動も通常よりずっと機敏に、滑らかになる。

9Bが窓をつかんで内側に引き、力任せに枠ごと取り外した。階下の敵はまだこちらに気付いていないが、ビルの警備員からの反撃がないことからして、このまま機を逃せば、ビル内を制圧してしまうだろう。

「感情の枝刈りを開始します。よろしいですか？」

テイロマはうなずいて脳内デバイスをオンにする。感情の二分探索が始まり、枝道がカットされるのとともに、全身の感覚が澄み切っていくのが感じられた。その爽快感すらも、ブレインブースタとしての9Bが肩代わりして演算する。ヘリンにエステを受けているときとは違い、自分の経験の質への頓着を手放しながら、テイロマは窓から飛び出した。

直後に続く9Bが、落下しながら重力支援を開始する。臓器にふわりと違和感が乗るが、枝刈りのおかげでそれに気を取られることはない。微妙なコントロールにより、サンダル履きでも着地の衝撃はほんのわずかだ。9Bのほうはその耐久力を活かし、巨体をそのまま路面に叩きつけた。その鈍い音に気づき、敵がこちらに銃口を向ける。

逃げた運転手に捨てられ沈黙したホヴァ・カーを挟んで、テイロマたちは地上の敵と対峙した。

こちらを向いた五丁の銃身から弾雨がばらまかれる前に、ティロマはロータリーに着地した低い姿勢のまま駆け出して一気に接近し、最後列にいた伝導性制御アーマの股のあいだに素足の膝をからませた。ティロマもそこそこ大柄とはいえ、武装した兵士に足払いをかけてもそのままでは通じなかつただろうが、いまは9Bの重力支援がある。敵は異常な慣性が乗った一撃を食らい、バランスを崩して転げた。隙を見逃さず、伝導性制御アーマの弱点である内股の布地に銃を押し当てて、電磁パルスショックを直接叩きこむと、敵は声もあげずに全身をけいれんさせて倒れた。顔の部分はティロマと同じくヘルメットでシールドされていてわからないが、どうやら人間だったようだ。死んだわけではないものの、これではらくは動けない。

セラピーガウンに硬化ジャケットをまとっただけのティロマの格好に、敵は一瞬判断を迷ったようだったが、明らかな敵対的意思を感じたのだろう、すぐに銃撃が始まっ

た。テイロマは跳ね起きて距離をとる。自分の熱線銃を二丁取り出して構えた9 Bが、警告を発しながら敵に歩み寄った。

「私たちはこの惑星の治安機構のほうからまいりました。あなたがたは武装携行に関するこの地域の法律に違反しています。ぜひ武器を捨て、投降してください。繰り返しします。私たちは……」

「9 B、人感！」

テイロマはヘルメットの通信装置を介して命じながら、射線をさえぎってくれる場所を探すため、セラピーガウンの裾を足にまわりつかせて駆け回った。視界にリアルタイムで重ね書きされる敵それぞれのデータに、色つきのアイコンが追加されていく。9 Bが攻撃を始める前に、人感センサを使って、人間かそうでないかを識別しているのだ。ロボット工学三原則を守るためには、そこで重要な概念となる「人間」の定義が不可欠なため、すべてのロボットには多かれ少なかれ人間とそうでないものを区

別する能力が備わっていたが、9 Bの場合は戦闘時に特別なセンサが搭載されており、機械的兵装に身を包んでいるために外見や動作からの判定が難しい相手でも、呼吸や視線の動きなどわずかな手がかりから推定を行うことができた。

A A Aの建物の中に倒れている警備員たちには、緑のアイコンが灯る。無力化された人間アイコン、そしておそらく撃たれて死にかけているのだ。冷たい感じのアイコンが表示された者は、人間ではなくロボットもしくは戦闘機械で、これは三原則第一条に反することなく致命的攻撃をしてよいというサインだ。テイロマはさっそく、ロータリーのベンチの裏にかがんで狙いをつけたが、9 Bも一足先に同じ判断をしたようで、定型の警告を繰り返しながら、居並ぶ敵のうち人間だけを残し、両手の熱線銃で機械どもを容赦なく破壊しはじめた。9 Bも銃弾を巨体に受け、塗装がはげたりへこんだりするが、まったくひるまない。9 Bにとつて、外骨格は第三条の「自己をまもらなければならぬ」でいう「自己」としては極めて低位の対象となっているか

ら多少の損傷は問題にならないし、そもそも少々の実弾では、9 Bの外骨格は傷つかないのだ。

「9 B、後ろ！」

ティロマの警告は不要だったのか、9 Bは振り向きもせず左腕だけを滑らかに動かし、自動通路に向けて熱線銃を発射した。音を立てずに接近しようとしていた、頭のない犬のような形状の戦闘機械が、脚部を焼き切られて倒れ、通路のガラス壁に 그리스液をまきちらす。狙い撃ちされた犬の横では、伝導性制御アーマがかがんで構えていたが、人間型のためまだ中身の判断がつかない。いっぽうで9 Bの右手は過熱状態になった熱線銃を捨て、そのまま手近の敵の首を捕えて持ち上げる。重力操作と頸部圧迫との相乗効果で、危害を最小限に抑えつつ、人間を締め落とそうというのだ。

「あなたの目の前の建物の非常階段に一体、人感なし」

9 Bからの警告レスポンス。感情の枝刈りのおかげで焦ることなく上を確認すると、

小型の多足歩行マシンが、非常階段の鉄柵に取りつき、陰險な昆虫のように這いあがっていた。その背部には、マシンに不釣り合いに巨大な砲身。迫撃砲の狙撃ポイントを探しているのだ。

「あんな格好のやつなら人間でも黙って叩き落とすね」

ティロマは手元の小型銃を熱線モードに切り替え、下から関節部分を狙って照射した。都市型迷彩に覆われた灰色の外装はすぐに赤熱し、鉄柵もろとも切断される。落ちてきたところに電磁パルスを当て、通信モジュールをショートさせると、昆虫型マシンは指示を受け取れなくなつて、あらぬところを引っかきはじめた。大きすぎる迫撃砲を背負っているため、ひっくり返ると元に戻れないのだ。

「9B、この口径を食らつたらまずい。索敵が終わるまで退避」

9Bが外骨格まで装備したタフなロボットであるとはいえ、この多足歩行マシンに装備されているような迫撃砲から携行徹甲弾を撃ちこまれたり、長時間の熱線を浴びた

りすれば、無傷というわけにはいかない。

ロボットを相棒にした戦闘では、まず人間を最小限の危害で無力化し、そのうえで火力を切り替え、ロボットや戦闘機械といった、ロボット工学三原則に抵触しない敵に対処するのがセオリーとなる。人間に危害を加える懸念さえなくなれば、精確な状況判断と頑強な身体とを持つロボットが、戦場で存分に暴れまわることができるためだ。だが今回の場合、人間を排除しきる前に乱戦に持ちこんだ都合上、9Bはかなり慎重に立ち回らざるをえなかったし、しかもティロマに十分な武装がないため、9Bがライムイエローのボディを敵前にさらけ出し、おとりとなつて敵を引き受けていた。いわば格好の的というわけだ。

「うーむ！」

別の方角から重金属の弾に肩を直撃され、9Bがうめく。よろけこそしないが外骨格の左半身がひしゃげ、亀裂から半透明の緩衝剤がこぼれた。弾丸の噴射煙の残滓を目

で追うテイロマのヘルメットの視界が、リズムよく点滅する。9 Bは被弾しながらも、その弾道から敵の位置を算出して送信してきたのだ。だが遠すぎて、テイロマの手元の小型銃ではどうにもならない。

「9 B、撃つてきたのは戦闘機械？」

「イエス。目視で確認しました。人間よりずっと小型ですし、友軍が近接戦闘している真ん中に打ちこむようなやつは、ロボットではありえませんが、しかしまずいですね、いま人感センサを破壊されたようです」

人感センサがやられたとなると、9 Bの戦力はぐっと落ちる。人間に危害を加えてしまふ懸念にロボット工学三原則が適用され、確実に人間でないと判断できる敵以外には、火器が撃ちこめなくなってしまうのだ。9 Bは撃ち合いをあきらめ、持ち上げていた人間の首根っこを振り捨てて、次を無事な右腕で締め落とそうと歩き出したが、白兵戦を続けるには、9 Bの損傷は大きすぎた。

ティロマは冷静に判断し、ロータリーの中心にいる9Bのほうへ、最短距離で駆け出した。狙撃されているなかへの突入はティロマを恐れさせないわけではなかったが、9Bに内蔵されたブレインブースタは正常に機能しており、自らの危険についてあれこれ悩むのを先回りして止めている。反応した9Bの重力支援を巧みに乗りこなして、転がっている戦闘機械をまたぐように飛び越えると、サンダル履きのままのティロマのスピードは、自動通路の上を疾走しているような不自然な速度まで上がった。

「敵の戦闘機械は、他から通信を受けて動いてるおもちゃよ。上空からジャミングネットワークをばらまく」

「オーケー、ティロマ。フィールドムーヴ・ツイストリフトですね」

接近するティロマに残った敵の自動小銃が襲いかかるが、9Bの重力支援がティロマの足元を路面に吸いつけ、横滑りさせるように動かした。ロータリーの路面すれすれまで傾いで銃撃をかわすティロマの体は、まるで氷上でのスケート演技のように優美

で、ロータリーに滑走痕を描くかのようにだった。氷上スポーツはこの時代ではあまり流行っていなかったが、数少ないフィギュアスケートキング・ファンの同僚からつけられたティロマのあだ名は、「銀盤の女王」。空々しいあだ名をティロマは完全に拒絶していたが、9 Bはそれを気に入ったらしく、ティロマを空中に投げ上げる大技を、ペアスケートキングからとって「ツイストリフト」と呼んでいた。戦場において嫌悪感は不要であり、誤解の余地なく伝わればそれでよい。

9 Bが取り出したジャミングネット射出装置を、ティロマはそのすぐ脇を滑りぬけながら受け取った。この装置はその丸型の形状から「釜」と呼ばれ、トリガを引くと中からいくつもの小さなディスクをばらまく。樹木や壁面に固着したディスクは、近距離通信以外のほとんどの電波帯に干渉する妨害電波を発信してジャミングの網を形成し、通信を攪乱された戦闘機械を無力化する、という仕掛けだった。警察などでも利用されているポピュラな装置だが、高い位置からばらまかないと妨害効果が薄い。

急角度でUターンしたティロマは、踏み切りのタイミングに備えて右足のサンダルを脱ぎ捨て、待ち構える9Bの腕に向けて飛びこんだ。

9Bが体全体を完全に正確に動かし、踏み台となつてティロマを投げ上げる。同じタイミングで太ももをぐつと張り伸ばすと、AAAの五階から飛び降りたときとは逆の変化が内臓にぐんとかかり、ティロマは歯を食いしばった。枝刈りのおかげで気を取られこそしないものの、無意識の反応は避けられないのだ。景色がゆっくりと回りながら眼下に広がる。先ほどまでのセラピーの影響か、ティロマの嗅覚は鋭敏になつていて、ヘルメットの中からでも、空気の変化を感じ取れた。粘膜を突く火薬の匂い、そして胸を悪くする油煙でいっぱいだった地上とは違う空気を肺いっぱいに吸いこんで浮遊感を押さえながら、投げ上げられたバランスが崩れないうちに、ティロマは「釜」のトリガを引いた。丸い蓋が勢いよく開いてディスクを次々と四散させ、戦場を覆っていく。

宙に投げ上げられた物体はなんであれ、重力の法則によって細い放物線を描き、地上に戻ってくる。羽根でもついていないかぎり、そのあいだ物体がそこから逃れるすべはない。投げ上げられバランスを崩したティロマの体は、格好の射的練習の的と言えた。この時代では、どんな間抜けな人間が撃つても、まともな武器なら落体計算ぐらいは簡単にやっつてのける。敵たちはそれぞれに遮蔽を取りながら、地上から自動小銃の狙いを定め、集中砲火した。

だがこの瞬間こそ、9 Bの重力支援がもつとも有効になるときだった。空中のティロマをおとりにして小型バスの陰に撤退しながら、9 Bは精妙に重力加速度を調節して計算を狂わせ、ティロマを弾道からそらしつづけた。避けきれなかった弾が硬化ジャケットをかすめるが、それはティロマの了解の範囲だ。体を丸めて「釜」の蓋に身を隠しながら、ティロマはぶじ着地した。身を守るのは9 Bのためでもあった。ティロマが一連の動作で危険にさらされる懸念が増せば、それだけ9 Bはロボット工学三原

則と衝突することになる。

着地と同時に周囲を確認すると、戦闘機械の調子が明らかにおかしくなっていた。妨害電波が功を奏したようだ。迫撃砲による狙い撃ちもない。残るのは、自律して行動できる人間か、あるいはロボットだけだ。9 Bが外骨格を開き、今度は帯電弾を打ち出す自動小銃を取り出して、小型バスの陰から威嚇めいた射撃をした。殺傷力こそないが、かすめれば武器の電子制御を破壊できる可能性がある、厄介な弾だ。敵が出てこられなくなったのに乗じてティロマも、小銃の着弾で歪みに歪んだ「釜」を捨てて、同じくらい歪んだホヴァ・カーのドアの裏側に逃げこんだ。

9 Bとの近距離通信が、チャンネルを変えて復活する。ジャミングネットのもとでも、中継なしの近距離通信ならば、阻害されないで済むチャンネルがあるのだ。

「残りは？」

呼吸を整えながら短くティロマがきくと、9 Bは人感センサのキャッシュユを確認し、

「三体確認できます。人感センサの記録では、あなた以外に二人の人間がいたはずで  
す、テイロマ。一体は自律タイプの戦闘機械と思われませんが、どれがそうかについて  
は確信が持てません」

と答えた。人間の判定さえできれば、9 Bは人間でないものを片付けることができる  
のだが、そうはいかないようだ。9 Bは銃撃の隙について一瞬だけ体を傾げ、テイロ  
マの位置を確認した。

「敵が実弾銃から熱線銃に切り替えています。テイロマ、その遮蔽では不十分です。  
耐火粘土製の遮蔽まで移動してください」

「あなたがまともな武器をよこしてくれたらね」

頼りない軽量合金のドアの陰をじりじりと動きながら、テイロマは返した。

「その発言はご自身の安全を盾にとった脅迫の可能性がありますが、これはあなたが  
私のよき友人であるという事実と反する推論ですので、無視しようと思いません。この

サロンへの道中、あなたは殺傷力の高い武器の使用について、倫理的立場に基づいた説得を行いましたね、テイロマ？」

熱線がふた筋ほど走り、遮蔽にしていた車両の一部が切断された。もう持たないだろう。別の場所へ移動しなければならない。

「そうね、それで敵の武器の型はわかった？」

周囲のビルに目をやって、地上の三体だけを相手にすればよいことを確認しながら、テイロマは照会した。熱線銃は一回の照射ごとに銃身の冷却が必要で、それにかかる時間は出力や製造年によって大いに異なる。したがって再照射までのインターヴァルは、熱線銃の性能を示す重要な情報だ。9Bはそのデータをじゅうぶん持っている。

「グッドマン社のGX型のいずれかと推察できます。工作用ですので射程は長くありませんが、出力は高いのであなたの殺傷には二十メートルの距離でも十分でしょう。

ところでその倫理的論証について私は異議があります」

「いま私が殺傷されそうってときに論証の話？ 私の集中力を削ぐことで……」

横転した車両のサイドミラー越しに、敵が兵装をまた切り替えたのが見えた。即座にティロマは9Bがいるのとはべつの車両のかげへと転げこみ、実弾をかわした。硬化ジャケットをまもっていれば小口径の実弾銃はほぼ無害だが、当然ながらジャケットの覆う範囲には限りがあり、たとえば素足に傷をつくれれば身動きがとれなくなる可能性があった。

「……削ぐことで、私に危害が及べば、それは第一条に反するんでしょう」

「そうならないよう、感情の枝刈りに尽力します。また、私の外骨格は熱線銃の直撃を十六秒間耐える遮蔽を提供できます。また、もしあなたの論証が成功裡に終わっていることがわかれば、私はよろこんで、お望みどおり武器を提供します」

十六秒あればティロマはこの場から脱出することはできるだろうが、それでは目的は果たせない。いますべきことは、熱線銃のインターヴアルが過ぎるまでのわずかなあ

いだに、9 Bを再び説得し、敵方の人間の殺傷を帰結しかねない行為に、そうするよい理由を与えることだった。

「では、私の論証のどこに不満があつたか手短かに教えて」  
テイロマは手榴弾か何かに見えることを期待しながら、刑事IDを明後日の方向に放り投げた。おとりのIDははたして実弾の嵐にまかれて鋭い音を立てる。それを背後に聞きながら、テイロマは9 Bの隣まで走り寄った。間近で見ると9 Bの外骨格の損傷は激しい。幸いにも人感センサなどの故障部分は上半身に集中しており、テイロマがあてにしている内蔵武器はまだ機能しそうだった。だがまずはその持ち主である9 Bを説得しなくてはならない。

「はい。あなたの論証はこうでした。同じく正しいことを行為するにしても、その動機が友人を守ることにあるか、それとも単に道徳的規則に準じることにあるかで、その行為の善さは異なってくる。模範とすべき有徳な知的行為者であれば、前者を選ぶ

であろう、と」

9 Bは明瞭だが早口に説明しはじめた（論証を列挙するときのロボットは概してそうなのだが）。その内容を吟味しながら、ティロマは遮蔽の向こうに耳をそばだてる。足音。ティロマたちにもう有効な武器がないと判断したのか、敵はこちらに近寄ってくるのだ。

「そして、私はティロマの友人であることを考慮すると、私が有徳な行為者でありたいならば、友人を守るために自らの武装を提供すべきである。こういうことでしたね」ティロマは電磁照射銃の安全装置に指をかけながら、もう片方の手を素早く振り下ろして9 Bに見せた。これは論理学上のハンドシグナルで、論証を最後まで続けるように促すものだ。

「はい。この論証を徳倫理的論証と呼びましょう。さて、私はこの論証に先ほどは納得しましたが、いまやそうではありません。何となれば、私はたしかに徳倫理的立場

をとった者がこの論証で説得されることは認めましたが、私が徳倫理的立場に立つべきかについては、何ら説得を受けていないからです。私はむしろ、みずからを義務論的立場に立つ行為者とみなしています」

戦場にはおよそ似つかわしくない発言だったが、贅沢を言っではいられない。テイロマが握っている電磁照射銃は、安全装置を外せば熱線銃となる。迫ってくる戦闘機械をこれで破壊するか、少なくとも無力化することはできるだろう。しかし敵方にはどうやら人間が、それも二人はいるらしかった。そしてテイロマにも9Bにも、武装した戦闘機械と人間との区別はまだついていない。ということ、テイロマたちからの攻撃は偶然に人間への危害となる可能性があり、そしてロボット工学三原則の命じるところでは、9Bはそれを阻止するに違いなかった。つまり9Bを説得できなければ、手元の電磁照射銃を熱線モードに切り替えて反撃することさえ覚束ないのだ。

テイロマは考えを巡らせた。選択肢はいくつかある。三人の敵のうちだれが人間か

を、9 Bの破壊された人感センサーなしで、自分で見抜けるだろうか？ これは戦闘機械が武装した人間にカムフラージュされている以上、そもそも難しいし、観察のために顔を出せば、熱線銃のインターヴアルはまだ過ぎていないとしても、先ほどのIDのように実弾をくらい、美顔術では修復できないほどの傷を負うことうけあいだろう。では、9 Bを出し抜いて、早撃ちで敵を全滅させるのはどうか？ これは可能かもしれないが最後の手段だ。9 Bとの信頼関係を永久に損なうおそれがあるからだ。正当防衛と理由をつけたとしても、人間を殺傷する性向のあるものは、9 Bをはじめとするロボットの倫理観とは相いれない。それに9 Bは危害を食い止められなかったことを悔やみ、自らの陽電子脳に深刻なダメージを負うおそれもあった。

「それで、あなたの内なる道徳法則は、ロボット工学三原則つてことね」

「そうです。私は、そうすることがいかに卑怯か冷酷かまたは臆病と非難されるにしても、人間に危害を加えるようなことはいたしません。その点で私は有徳であるより

義務に従うことを選びます。また、そうすることが有感覺者の幸福総量をいかに増進させるとしても、人間に危害を加えることを望みません。その点で私にとっては、第一条は功利主義的計算より上位にあるわけです。他にも有力な倫理学上の立場を検討した結果として、私は自らを道徳についての義務論的行為者であると判断したのです」

9 Bはいまのところ敵を始末するための武装を提供してくれそうにはないが、もちろん、敵からティロマへの危害を見逃そうとしているわけでもないはずだった。ティロマの平和的逃走だけが目的であれば、9 Bは申し分ない働きをしてくれるだろう。だがティロマには帯びてきた使命があった。AAAでのエステティックの場を借りた、ヘリンへのインタビュー。そのためにはヘリンを敵に接触させてはならない。敵がヘリンの重要性をどう考えているかは不明だが、白昼堂々とAAAに攻撃を加えてきたことからして、少なくともそうするだけの価値があるものがそこにあると判断しているのだろう。ここで退却すれば、ヘリンを永遠に失ってしまう可能性は高かった。

「なお、敵から受けているガンマ線照射は、ここまでの推論にまったく影響を与えていないと言って差し支えありません。私の外骨格は首尾よく機能しており、陽電子脳に異常は見られません」

ということは9 Bの発狂に乗じて何かすることもできないわけだ。やはり哲学的説得によつて9 Bを同意させるほかない。戦場を油断なく観察し、敵との距離を推測しながら、テイロマは適切でかつ短い論証を考えようとした。それぐらいのことができなかったら、形而上学刑事を名乗つて行動する資格はない。

「わかった。9 Bの異議はもつともだと認めましょう。ここであなたを徳倫理的立場に転向させる論証はなくてもないけど、時間的余裕がそれを許さない。新しく形而上学的論証に訴えるから、確認して」

「新しい論証！ すばらしい、ぜひ教えてください。敵の熱線銃の再チャージ完了まであと十四秒です」

9 Bの外骨格も考慮すれば、猶予は三十秒きっかり。テイロマは電磁パルス銃を背後に向けて五発連続して発射し、9 Bのボディに隠れるように、身を沿わせて立ち上がった。

「あなたは私に武装を提供する必要はありません。そのかわり、一分ほど陽電子脳を休止させて、私にあなたのボディを外骨格ごと私の自由にさせてほしい。すべてのロツクは外した状態で」

「休止、星間輸送中のときのようにということですね。しかしそうしたとして、あなたは私のボディを使って、敵に攻撃を加えるわけですね、テイロマ？ 私にはそれを見過ごすことはできません。敵のなかには人間がおり、休止状態といえど私がそれに危害を加えることになるわけですから」

「ところが、そうはならない」

戦場のかすかな変化を感じとり、テイロマも早口になる。三丁の熱線銃がまた構えら

れたらしいのだ。実弾と違い、熱線銃の威力は通常の車体による遮蔽では消せない。軽量化のためほとんどの箇所がプラスチック製となっているホヴァ・カーは、照射を受ければもちろん両断され、9 Bとその後ろのテイロマの姿をあらわにするだろう。

「まず、あなたは自分が組み立てられる以前、陽電子脳が機能する以前のネジや金属板について、それをあなた自身だと思う？」

一瞬の計算。9 Bにも状況の緊急性はわかっている。自らの回答によってテイロマの論証全体を推察でき、それに納得したならば、段階的な問答はやめてすぐに指示に従うつもりなのだろう。だが9 Bはまだテイロマと議論をつづきたい様子だった。

「組み立て以前には、それは私ではありませんね。私は自身の歴史が、陽電子脳のはじめで動作した瞬間から始まっていると理解しています。そう考えない場合には、私は自分が存在しはじめた時期を特定できなくなってしまうからです。たとえば、もし陽電子脳の動作ではなく、私の各 부품のいずれかの存在の起点を私の存在の起点とと

らえようとするならば、私の各部品のもまた一部分の存在についても、起点としての地位を与えない理由はありません。そうなると私の存在の起点は、究極的には原子的な小部分の存在の起点と同一視できるところまで滑ってしまいます。しかしそのような小部分と私とを、存在論的に同等の地位に置くことはできません。したがってこの滑り坂はどこかで止めるべきであり……」

9 Bは右手をひらひらさせながら斜めに動かしてみせた。滑り坂論法のハンドシグナルだ。

「そうね、私も陽電子脳の賦活に、あなたの存在についての特権的な存在論的関与を認めるべきだと思う。ところで9 B、さっきの電磁パルス照射で動作不能になった戦闘機械はある？」

「残念ながら、私のモニタでは敵の異常を感知できません。跳弾も含めすべて外れだったようです。熱線照射開始」

論証するのほとんど変わらない口調で9 Bは危険を知らせた。熱線は可聴音ぎりぎりの高音を立てながら照射され、車体を焼き切っていく。遮蔽がなくなったとき、わずかでも体が9 Bの陰からはみ出していれば、その部分が高熱分解されるだろう。硬化ジャケットは銃弾ならかなりの口径のものまでよく防ぐが高熱に弱く、何の役にも立たない。だが、残り二十秒足らずの命運となっても、感情の枝刈りは依然有効で、テイロマは混乱や恐怖に襲われずに議論を再開できた。

「では論証をつづけましょう、さて、あなたの存在の起点が、陽電子脳の賦活に歴史的に依存していたとすれば、陽電子脳の動作が休止しているあいだ、あなたは存在していないことになる。陽電子脳の休止は人間の睡眠や気絶と違って、わずかの活動もしない徹底的なものだからね。そして追加の前提として、存在しないものに責任を問うことはできない。したがって、陽電子脳の動作が休止しているあいだに私があなたのボディで何をしようと、その責任を存在しないあなたに問うことはできない——納

得？」

遮蔽の車両の上半分が、横にずれはじめた。ティロマたちにとってうれしくない滑り坂である。熱線銃の溶断により、あつというまに重みに耐えられなくなったのだ。

「いえ、まだ納得できません。私が存在しなければ私が人間に危害を加えることはありえないし、責任を問えない、これは認めましょう。しかし、私の存在が陽電子脳の賦活に歴史的に依存していたとしても、いったん動作がはじまったあとは、私は継続的に存在しているはずです。たとえば、星間輸送による休止状態のあと、私は自身を星間輸送されたのだと考えます。たとえ陽電子脳が休止し、物理的には賦活前とまったく同等のポテンシャルにあったとしてもです。物理的にはもしあなたの主張が正しければ、最初の星で陽電子脳の休止とともに私の存在が消滅し、輸送先の星で再び活動がはじまるとともに、私が再び存在しはじめるようになった、ということになります。しかしそのような存在のしかたは不合理です。ですから、星間輸送のあいだも、

私は継続して存在していたはずです」

テイロマの唇の端がわずかにひくついた。9 Bの支援による感情の枝刈りがなければ、下唇をかんで悔しがっていたところだろう。たしかに歴史的な存在依存の主張だけでは、その後の恒常的な存在依存まで言うことは難しい。これが言えなければ、休止状態でも9 Bは存在することになるので、休止状態にした9 Bのボディを使ってテイロマが加える危害は、9 B自身に加えた危害ということになりかねない。テイロマは完全な立証をするのではなく、自分の立場が少なくとも9 Bの立場と同等の効力を持つと示すことにした。効力が同等であれば、この緊急時に、9 Bがテイロマに役立つほうの仮説を選ぶ公算は高い。選ばないのであれば9 Bのほうに、その理由を示す必要が出てくる。哲学的議論で負けないためのテクニクの一つ、立証責任の押しつけである。

「オーケー、存在は時空的に連続しているはずだ、それに反するような存在のしかた

はありえない、ってことね。では反例を示します。私たちは体験したことないけど、超空間を使ったワープ航法が確立されています」

自分を抱えるように背後に立つ9 Bによく見えるよう、ティロマは肘をまげて腕を前に出す。反例のハンドシグナル。

「スペースシップのパイロットは、ワープ航法の前後で同一の存在だけど、一瞬のうちに空間的に断絶した位置に現れる以上、四次元的に見て断続的な存在者になります。ここであなたが（そうだと願いたいけど）科学的世界観と折り合いのつく時間論的立場を選ぶならば、当然、時間についての四次元主義を標榜するはず。ということとは、少なくとも空間的にみて断続的な存在者は、現に存在することになる」

9 Bが慎重に右足を後ろへ引く。これは譲歩のサインだ。だが熱線はすでに9 Bの外骨格に直撃しはじめていた。9 Bの顔が危険を知らせる表情（人間で言えば苦痛といったところだ）で歪む。

「どけ！ ブレインブースタふぜいが！」

合成音声による悪態が敵から飛んだ。敵とはいえおそらく人間の命令にはちがいないが、人間であるティロマを守るため、9 Bは命令を無視した。第一条はつねに第二条に優先するのだ。

「こらえて9 B。そして、超空間航法を応用した時間旅行も（いまのところ一方通行と目されてはいるけど）研究されています。理論だけでなく実際上も、空間と時間とは対照可能な概念であることが示唆されている。つまり、時間旅行によって存在者が消滅すると考えるのでなければ、先ほどと同様、時間的に断続した存在者も、科学的に可能であるということ。科学的可能性は形而上学的可能性を含意します。したがって、断続的存在は不合理ではない」

9 Bは両手を上にあげた、証明終了、納得を表すハンドシグナルだ！ 同時に9 Bの表情が完全な無になり、全身がまっすぐに硬直する。陽電子脳が休止し、マニユアル

モードに移行したのだ。この状態であれば、9 Bの重力子操作装置も、そして9 Bのボデイそのものに搭載された兵器も、ティロマの自由になる。ティロマは横っ飛びになりながら、マーシャルアーツの要領で、八フィートはある9 Bの巨体をかっぎあげ、その重心を右肩に預けた。もちろんティロマの体術だけでなく、重力子操作の支援のなせるわざだ。狙いを不意に外された熱線がAAAの入っているビルをえぐりながら、ティロマを追う。

「悪いけど私のブレインブースタは……」

武装ロックは約束どおりすべて外れている。ティロマはトリガになっている9 Bの外骨格胸部をつかむと、ぴんと張った脚部のほうを敵に向けた。照準は三体をすべて収めている。脚部の展開が一瞬で完了する、そこが砲門なのだ。9 Bによる感情の枝刈りが休止したため、焦りや緊張が一気に全身を襲って震える。それを打ち消すように、ティロマは宣言した。

「バズーカ・ボンデドだから」

トリガを絞る、フラッシュユソして爆発。9 Bのボディはいまや無反動砲と化していて、発射による肩への衝撃はほとんどなかったが、至近距離からの爆風は防げない。ティロマは姿勢を崩し、さかさまになってAAAのエントランス階段まで吹き飛ばされた。

9 B、ブロードバンド・ブレインブースタ・バイ・バイナリブランピング・バズーカズ・ボンデドは、爆煙でまだ視界がクリアにならないうちから、陽電子脳を復帰させ、投げ出された体を起こした。目の前には黒焦げに焼かれた兵士が三体。うち二体は機械部分が露出しており、あからさまに人間ではなかった。9 Bは、ひずんだ自身の外骨格を曲げるのに苦心しつつ、かがみこんで残り一体の様子を確認した。人感センサーはまだ機能しないが、化学センサーでの検知結果は人間を示している。優れた兵装のおかげか、かろうじて息があったが、とはいえ速やかに処置が必要だった。9 Bは外骨格に装備された応急救命セットを取り出す。目の前の人間に最大の危害（つまり

死)がもたされようとしているのを看過できるロボットはいない。それが敵であり、自らの破壊を狙っていた者どもであろうともだ。

「テイロマ、近くにいますか？ 私の人感センサは故障しており、また他の全センサをこの一名の人間の救命に使用しているため、あなたを探すことができません。無事であれば通信によるコンタクトを希望します」

「生きてる……生きてるけども、全身ぎいぎい言うよ」

テイロマはほとんど這うようにして、かがんでいる9Bのそばまでやってきた。9Bはセンサをフルに使い、寝転がった敵の呼吸音や血管の細動を確認している。砕けたヘルメットをはぎとると、現れたのは酒で汚れた歯をした若者だった。兵士として雇われたのはスラム地区の人間だったのかもしれない。

「テイロマ、あなたを確認しました。私のボディのどこでもいいので、あなたの皮膚を押し当てていただけますか？ けっこう。脈拍、血圧は緊張状態ですが正常値の範

困です。まもなく感情の枝刈りを再開しますので、すぐに気分もよくなるでしょう」  
ティロマは9Bに覆いかぶさるような状態で体を預け、しばらく骨の痛みにこらえながら空えづきを続けていたが、やがて頭がすつきりし、押さえられなかった手足の震えも引いていった。枝刈りが再開したのだ。危険な状態で論証を成功させた達成感も含め、よけいな情動はすべて、ティロマが意識的に制御可能なレベルまで押さえられた。勝利を反芻して感慨にふけることも、自身が失敗して背中から溶解されていた可能性におののくこともない。それは現状に関して無為な枝道だった。

「生存した人間は一名と言った？」

「はい。人間一名、機能停止した戦闘機械が二体。戦闘機械の武装はすべて破損したようですが、念のためガンマ線照射をして不可逆的に破壊したほうがよいでしょう」  
ロボットにとって、人間に危害を加えようとするものは、落石であろうと天災であろうと、もちろん戦闘機械であろうと排除の対象である。そこに同じ機械の同族へのよ

しみといったあいまいな点はなかった。むしろロボットたちは、人間のほうを自らの同族と見なしているのだろう。

戦闘機械は倒れているが、各所がボディバランスを取り戻そうと、きしみながらゆっくりと動いている。その全身に、ティロマは9Bの上に寝そべったまま、腕だけ動かして電磁パルス銃をまんべんなく浴びせた。ガンマ線照射ほど徹底的ではないが、パルス反射板が壊れて内部構造が露出している戦闘機械に対しては、だいたい同じぐらいの効果がある。強烈なトランキライザ信号により、人間の神経にあたる箇所が次々に混乱をきたし、戦闘機械はまったく動かなくなった。

「あなたの人感センサ、修理だけじゃなくて交換も必要なんじゃないの。最初の報告だと、人間は二名いたんでしょう。本当は一人だけだった？」

「不明です。残り一名は逃走した可能性があります」

「もしくは、弾幕に紛れて中に向かったか。ヘリンが危ない。上に行くよ」

敵に出し抜かれた憤りが心を覆うが、感情の枝刈りがそこにとどまることを許さない。ティロマは瓦礫のほこりで悪くなつた視界をぬぐいながら立ち上がった。

「申し訳ないのですが、私はこの人間の生命を安定させるまで、この場にとどまる義務があります。先に行ってください」

瀕死の男の顔はどす黒くうっ血してきていて、循環器の異常を感じさせた。ティロマはそいつと、ついでに9Bのことも蹴り飛ばしてやりたくなつたが、その怒りは即座に枝刈りされて低いレベルに抑えられ、実行には至らない。素足でそんなことをしても爪が割れるのが落ちだろう、と合理化を意識し、ティロマは五階へと駆けた。

受付には一見すると人間の気配がなかったが、ティロマがマットの上を警戒しながら入っていくと、受付デスクの後ろで青年が小さくなつて震えているのが見つかった。

「客のティロマです。だいじょうぶ」

小声でささやくと、受付のフニカ青年がそつと顔を出した。

「他の店員は？」

「わかりませんが、だれか入ってきて、でも銃の音は……」

フユニカ青年は混乱していてそこから言葉が継げない様子だ。正確に話せと、ティロマは両腕を前に出して「慣習への不明確な訴え」のハンドシグナルをしようとしたが、通じるとも思えないので思いとどまった。

「この階で、銃の音はした？」

フユニカ青年は黙って首を横に振った。ならば、敵はここへは来たが、まだヘリンに攻撃を加えてはいないか、あるいは実弾銃を使うまでもなくヘリンを確保したかだ。AAAの空間はゆとりあるとはいえ屋外ほど広いわけではなく、危険な熱線銃を使つたとは思えなかった。

爆発のときしたたかに打った左のものもをかばいながら、忍び足で奥へ進んで様子を見るかがう。素足のティロマとは違う、大胆な足音。やはり敵は侵入していた。ヒーリ

ングスペースの物理カーテンを、一部屋ずつめくって確認しているようで、金属フツク之音とともに悲鳴があがっているのは銃を突き付けられた客かセラピストだろう。敵はだれを探しているのか、それはティロマにはわからなかったが、ともあれ、うかつに近づいて暴れられたら、ヘリンやティロマだけでなく、店内の人間すべてが危険だ。ヒーリングスペースの壁は物理カーテンほどではないとはいえ薄く（9Bがうっかり破壊してしまうほどだ）、実弾ならかんとんに貫通して思わぬところを傷つけるだろう。ティロマは廊下の角で慎重に電磁パルス銃を構え、安全装置を外した。

ティロマが施術を受けていたヒーリングスペースは一番奥で、ヘリンがまだ移動していなければ、そこにいるはずだった。最後の物理カーテンを開く直前で、敵の構える実弾銃を狙い撃って壊し、そのまま突進して取り押さえるのが最善だと、ティロマは考えた。近接戦になれば、兵装の隙間から熱線銃を直接叩きこむことも可能だろう。だが痛む体でどこまでできるか、ティロマは不安だった。五階にあがったことで9B

から距離ができてしまい、感情の枝刈りは使えない。自分自身で迷いを振り切る必要があった。

奥から一つ手前の紫の物理カーテンを、敵が片手でどかす。声はあがらない、そのスペースは無人だったのだ。ならばチャンスはいまか？ テイロマは熱線銃を構えて身乗り出した。左ももに痛みが走り、照準がずれる。外れだ！ 廊下の奥の壁がぶすぶすと煙をあげる。テイロマは熱線の光跡の調整をあきらめ、廊下の窓に突っこみかけた体勢を立て直すと、頭を低くして突進しようと構えた。だがテイロマが飛びかかる前に、敵はうめきはじめた。

敵の太いうなり声は合成音声による威嚇ではない。ヘルメットの下で男が恐慌をきたしているのだ。だがそれはテイロマの熱線によるものではなかった。ヒーリングスペースから噴射されている白い霧が、ヘルメットの視界を覆っていた。男の実弾銃もその霧に包まれ、動作しないようだ。テイロマが腰を狙ってタックルをくらわすと、

そのまま男は倒れこんだ。両手を顔面に張りつけたおかしな姿勢のまま、足だけがもがいている。

「テイロマさん、少し下がっていただけますか、これから足のほうも固めていきますので」

施術のときとそう調子が変わらない声。一番奥の部屋の物理カーテンが開き、スプレー器を持ったヘリンが出てきた。そのままヘリンは白いガスを噴霧し、男の兵装のひざの部分塗りを固めていく。

「それは？」

「こちら、先ほど少しお話に出ました、美術品固着に使うスプレー状のアイス・ラックです。こちらはお客様に合わせていちばん強めのタイプとなっておりますので、専用のお薬を用いるまで、およそ半年は氷漬け同然の状態を保ちます。バイオシリコン製でして、万が一吸いこんでしまっても害はありませんから、ご安心ください」

精油やアロマを解説するのと同様、人間を落ち着かせるのんびりとした調子だった。ヘリンは9Bが破壊した壁越しに、奥の部屋からこのラッカを散布して銃に塗りつけ、敵の動きを止めたのだった。相手の虚をつく胆力に、テイロマは内心舌をまいた。

さらにたっぷり一本スプレーを使って、男をまったく身動きがとれないようにしてから、ヘリンは大きく息をついた。ヒーリングスペースからは、客やセラピストたちがそつと出てくる。どうやらこのフロアに怪我人はいないようだ。テイロマは念のため、救急部隊の到着する時間を見ようと、通信端末を開いた。戦闘中に自分で射出した妨害フィールドの影響で、まだ外部との通信は回復しておらず、無線アイコンは点滅状態だ。しかしあれだけの大立ち回りをやった以上、ここに警察当局がやってくるのは時間の問題だった。

「暴徒鎮圧にご協力感謝します、ヘリンさん。形而上学刑事として」  
テイロマはヘルメットを外し、息を整えながらヘリンに声をかけた。

「お客様、私どものほうこそ、お礼をしなくてはなりません。それと、大変失礼ながら、そちらの窓から外の様子見ていました。大活躍でしたね！　まるで劇場舞踏みたいに決まっています。マッサージのときも申し上げましたけど、やっぱり刑事さんですわね」

「ええ、まあ」

マッサージ中に、形而上学刑事は荒くれの相手が得意ではないのだと言った手前、ティロマはいいかげんにごまかすほかなかった。

「ひとまずお着替えを、それともその前にシャワーお使いになりますか？　よければ足のお怪我也、薬効のあるフットバスにつけていただけると治りが早いです」

「ありがとうございます、タオルを取ってもらえると助かります。すぐ私の服に着替えたいから」

「はい、ではそちらにお掛けください」

ティロマは体をいたわりながら、慎重にベッドに腰をおろした。打ち身になっている

部分が痛んだからだ。硬化ジャケットを脱いで襟にある小さなバルブをねじると、ジャケットの結晶化が解け、手の中でみるみるうちに元の柔らかい形へと戻っていく。

「そうだひとつ聞いてもよろしいですか？ お連れのロボットのことなんですけど、あれはどういう仕掛けなんでしょう、遠目に見ると、ひとを撃っていたようだったんですが……私は詳しくないんですけど、ロボットはひとを決して傷つけられないそうですよね。それとも刑事さんロボットっていうのは、やっぱり特別なんですか？」

この女もロボット恐怖症をわずらっているのだろうか？ 治安維持のためであっても、ロボットが人間を攻撃するおそれがあるというのは、人間にとってそれほど楽しい知らせではない。ティロマはセラピーガウンを脱いでアンダシャツとストラックスに履き替えながら、ヘリンを観察した。9Bへの恐れからではなく、純粹な好奇心から質問しているようだった。もしかするとロボット工学三原則の重大さについても、言葉以上に熟知しているのかもしれない。そのうえで9Bがそれをどのようにかいくぐった

のか、それをヘリンは知りたがっているのだ。

9 Bに聞かせた論証を繰り返すと、ヘリンは目を輝かせた。

「得心しました！ 正義のためといっても、ロボットは本当に融通が効かないんですね。それをうまく手なずけるんですからさすがに形而上学刑事さんです」

「手なずけるっていうのは、9 Bが聞いたら気分を害するかな。9 Bは私の部下だけど、それ以外の点では対等な同僚だから」

突然の襲撃が落ち着いたいま、腰かけたまま完全に元に戻ったジャケットをはおりながら、テイロマは目的が果たせそうか図った。9 Bについての形而上学的論証に関心を示す態度は合格だが、ヘリンが自身で論証を組み立てる能力があるかどうかは、まだわからない。それを判定しきって、ヘリンを説得するのと、当局がここに来て事態がややこしくなるのとどちらが早いのか。間に合わないようなら、ヘリンの確保はあきらめなくてはならない。いまテイロマはなかばそちらに傾いており、早くもヘリンの

不適合性をあげつらう書類について考えはじめていた。

海藻スープに浸したタオルをティロマに渡しながら、ヘリンは言った。

「失礼しました。ところで、いまの9Bさんのお話を聞いていて、先ほどの盗難事件の仕掛けが判断できたみたいなんですが、ティロマさん興味ありますか？」

ティロマは保身のための書類を頭から追ひ払った。ティロマたちにとっても未解決の『美そのもの』消失事件、これを解決したというのなら、危険を冒してでもヘリンを口説く価値はある。

ヘリンがほこりにまみれたジャケットをていねいにブラッシングしてくれるのを、テイロマは黙ってながめていた。清潔で安らぎによる管理が行き届いたこのヒーリングスペースに、火薬や土煙が持ちこまれたことはこれまでなかっただろう。部屋の外では、エステを受けに来た他の客が店員と何やら揉めているようで（廊下に転がしたままにしてある男のことだろうか）、AAAの施術フロア全体がざわついていたが、ヘリンがやわらかな物腰でさつとブラシを動かすと、エステのときのような穏やかな感じが部屋に満ちるようだった。テイロマは『美そのもの』消失についての話を聞き出そうとやきもきしつつも、ヘリンの手つきに先ほどのマッサージ施術を思い返していた。辺境惑星からのバックミュージックが途絶えようと、壁に大穴があいていようと、手つきや物腰ひとつで安らぎの空間を演出できるのだとしたら、たしかにたいした才能と言えた。

「それで、『美そのもの』が二人の警備ロボットの前から消えた仕掛け、思いついた？」  
「ええ。いまの9Bさんの、何と言いますか、頑固さと言ったらいいか、自分で納得したことにはとことん従う姿勢、それが鍵になると思うのですね。たとえティロマさんのようにご友人が危険でも、ロボット工学三原則には従うし、また形而上学的議論に説得力を感じれば、くだくだと悩むことなく約束を守る。そういうロボットの性質が、鍵になっているかと」

たしかに9Bは、頑固と言えば頑固だが、論理的説得のもとでは非常に柔軟と言えた。  
9Bたちロボットに感情の枝刈りはいらぬ。過ちはそう認め、(第三条に反しないかぎり)保身を図らず論理的帰結に従う。ティロマは自らの形而上学的素養が、護身用ロボットとしては高性能すぎる9Bを扱ううえでの、ある種のロックになっているとさえ感じていた。

「たしかにそうね。9Bだけじゃなくて、ロボットは性能にもよるけど、ほとんどは

そういう、愚直さみたいな性質を持つてると思う」

「愚直さ、ええ、そう言ってもよいのかもしれませんが。今回の消失事件でも、証言者はそうした愚直なロボット警備員さんだったわけです。ガーネットさんは（美術品管理人が犯人だと私も思います）そこに付けこんで、彼らに消失を誤認させたのです」

「誤認？ やっぱり、警備ロボットが『美そのもの』の消失を報告してから、ガーネットがTSU5号の貨物室に入るまで、『美そのもの』はまだそこにあったと」

「そこが、なんとも言いがたいところです」

ヘリンは手を止め、問診シートデバイスを手を取った。親指で操作するとテイロマの回答した枠が引っこみ、新規のキャンバスが作成される。ヘリンは小指の爪で画面をなぞり、デバイスに三つの図形を描いた。

「この『美そのもの』が存在したとか、消失したとか言うとき、わたくしたちは実際には、形而上学的に見て特定の立場をとらざるをえません。先ほどテイロマさんが9

Bさんを説得なさった際には、ロボットの存在のありかたは、陽電子脳の活動に依存したものだ、という主張をなさったそうですね。陽電子脳が活動しているとき、ロボットは存在している。陽電子脳が活動していないとき、同じロボットは存在していない」

「そう。ロボットは歩き回ったり塗装されたりする存在でもあるから、陽電子脳の活動と同一の存在というわけじゃないけど、あるロボットが存在するならば、それが存在するすべての時点において、特定の陽電子脳の活動もまた存在する、この依存関係は必然的だと、私は思う」

「ありがとうございます。わたくしは、その依存関係の当否については、はっきりした考えを持ち合わせておりませんが、そのようにして他のものやできごとの存在に依存した形でのみ存在する、そのような存在のありようをとるものがあること、これは間違いないように思います。わたくしの考えでは、シンイチロ・イクタさんが制作した芸術作品『美そのもの』もまた、形而上学的にみて、同様の依存的存在者ではない

かと思われるのです」

「どうということ？」

形而上学は、この世界の基礎的なありかたを、統一的、整合的に理解しようとする営みである。それはすなわち、この世界に存在するものやできごとを、基礎的なものとうえではないものとの階層に分けていく作業とも言える。この存在の階梯を探究するうえで、その基礎的なものとそうではないものとのあいだには、どんな関係が成り立っているのか、その候補のひとつが、こうした依存関係である。

ヘリンはデバイスに描いた図形に、そのまま小指で新たな図形を書きこんだ。三つの図形を覆う屋根のように描かれた楕円の内側に、『美そのもの』の名前が入れられる。「図を描きながら説明いたします。イクタさんは、『美そのもの』とは抽象的芸術作品であり、わたくしどもを含めた具体的存在者は、具体的なものを通してしかその鑑賞にアクセスできない、と主張しておいででした。この大きなマルが、『美そのもの』だ

と考えてください」

ティロマはベッドに腰かけて、前に抱えたヘルメットをどかした。

「オーケー。ということは、その下に描いてあるのは……」

「TSU5号をはじめとした三隻の星間輸送船が運んでいた、『美そのもの』の具体的例化物です。今回消えてしまったのは、この例化物のほうでした」

しなやかな二本の指でデバイスを叩くと、端に描かれていた図形が薄く消えた。

「さて、わたくしどもは芸術作品を、目や耳、五感で味わうことでアクセスするものと考えています。ですから、ものがなくなれば、芸術作品が消失した、あるいは大きな損傷を受けたと考えます。でも、この絵の状況をご覧ください。具体的例化物は一つ消えてしまいました。が、抽象的存在者としての『美そのもの』は、まったく問題なく残っています。この状況で、TSU5号のロボット警備員は、どんなことを報告するのでしょうか？」

テイロマは何のことかまだよくわかっていなかったが、デバイス上の図形を見れば、ひとまずその質問への答えは明らかだった。

「少なくとも、『美そのもの』が消失した……とは、認めないでしょうね」

「わたくしもそう考えます。もちろん、ロボット警備員のお二人も、自分たちが守るべき対象は抽象的存在者ではなく、運搬ケースのなかに時空的に位置する、具体的存在者である、ということとは、理解していただきましょう。でもそれは、イクタさんが制作した芸術作品そのもの、ええと、つまり、『美そのもの』ではなかったのです。イクタさんの指定した存在論的コミットメントを愚直に受け取るロボットにとつては」

コースガード社が雇用している警備ロボットはみな高性能とはいえ、形而上学的直観についての反省力まで持ち合わせている者ばかりではない。これは人間の場合ならば、常識に囚われた素朴であいまいな態度を意味するだろうが、ロボットにおいては逆に、純粹な形而上学的理論に従った厳格な態度を意味する。

「ところが、お話によれば、R・イナナキさんとR・サエズリさんとは、美術品管理人の問いかけに、『美そのもの』が消失した、と報告しました。これはお二人にとって、抽象的存在者の消失を報告しているのと同じです。なぜお二人はどのように考えたのでしょうか？ 一見すると、抽象的存在者の消滅は、具体的なものが消えるよりはるかにありそうもないことのように思えます。薬品をかけて溶かしたり、圧縮して隠したり、何かにまぎれて盗み出したりすることは、抽象物が相手ではできませんから」

T S U 5号が輸送していた、天然繊維質を丸めたボール状の造形物については、なくしてしまっただけならば、酸による焼却などの処分手段が考えられる。警察内部でも、T S U 5号の美術品管理人だったガーネットを容疑者として、処分手段からの捜査が進められていることを、テイロマは知っていた。

「ここで、先ほど申しました、依存関係が効いてきます。T S U 5号に送信された二

セのニュース、他の輸送船が爆発したという情報によって、二人のロボットは、残り二つの例化物が消失したと信じていました」

ヘリンの示すデバイスの画面上で、二つの図形が消える。

「そうか」

テイロマは息を吸ってひとりごちた。

「おわかりいただけたことと思います。例化物が一つ消えたところで、『美そのもの』がなくなったり、不完全なものになったりするわけではありません。しかしもし、抽象的存在者としての『美そのもの』の存在が、その具体的な例化物の存在に依存したものだとなれば、具体的例化物すべてが失われた状況では、『美そのもの』もまた消失する可能性があります」

「ちよつと待って。もう一度、ロボットの視点で考えてみて」

テイロマはヘリンの手からデバイスを抜き取ると、最初に消えたTSU5号の運ぶ例

化物を、再び描きこんだ。

「警備ロボットの立場はこう。まず、他の二隻に積んであった例化物が消える。でもこの時点では、まだ自分たちの警護しているケースの中には、最後の例化物が残っているはず。それなら、もし『美そのもの』が例化物に依存する抽象物だったとしても、まだ消失したことにはならない」

「いえ、それがそうではなかったのではないかと、わたくしは考えます」  
テイロマは立ったままのヘリンを見上げる。施術服の前でそっと手のひらを合わせた姿勢で、ヘリンは続けた。

「他の輸送船の荷物については、それが『美そのもの』の例化物であるという情報を、二人は与えられていました。では、最後に残った自分たちの荷物についてはどうでしょうか？ 美術施設で梱包された輸送ケースを、船内ではじめて開封したとき、彼らは何を見出したのでしょうか？」

「ん、それはつまり、白い、繊維質のボールでしょう。『美そのもの』の例化物として、作家が提示したもののひとつ」

「それは半分だけ正しいのです」

片手をゆっくりと上に向けながら、ヘリンは続けた。へりくだった態度ではあるが、その目は超然としていて、テイロマでもデバイスでもなく、どこか遠い惑星、もつと言うならアイデアの世界をながめているような感じだった。

「でも半分は間違いなんです。『美そのもの』の例化物はそれぞれ、特に共通点のない造形物でした。イクタさんはなぜそのようなものを、『美そのもの』の例化物として提示したのでしょうか？ イクタさんの制作的意図はどこにあったのでしょうか？ もし、例化物どうしのあいだに、たとえば色が赤いですとか、すぐにわかる共通点があったとしましょう。すると、イクタさんは『美そのもの』を抽象的例化物として制作した、と言えるでしょうか？」

「イクタの意図？」

話が急に芸術的な制作意図に飛んだのでティロマは面食らったが、考えてみればヘリソンの専門は分析美学であって、芸術作品について話すほうがむしろ自然だ。幸い、すぐによく似た形而上学的議論を思い起こせたので、ティロマは首を振った。

「たしかに、そうは言えないでしょうね。なぜなら、もし提示したものの共通点が、赤さという性質のように、すでによく知られた自然な抽象的対象だったとしたら、イクタはただ、赤いものを三つ作っただけになってしまう。自身が『美そのもの』という新しい抽象的対象を作り出したと主張するためには、それが、赤さとか質量五キログラムとかいった、よく知られた抽象的対象とは異なるものだと言張できなくてはならない。それが、イクタがてんでばらばらなものを提示した理由か」

「少なくともイクタさんの形而上学的主張を真に受けるならば、制作的意図をそのように捉えるべきだと考えます。さて、ここで二つの例化物が消滅し、残り一つだけに

なっていました。すると、例化物それぞれに等しく例化されていたはずの『美そのもの』が、いったいどんな抽象的対象であるか、知るすべがあるでしょうか？」

ヘリンはデバイスをまた手に乗せて、ティロマが元に戻したTSU5号の積荷の絵をゆっくりと広げ、楕円状の『美そのもの』を重ねた。それだけでティロマには、ヘリンの言わんとすることがわかった。

「この世にただ一つの例化物しか持たないとすれば、その例化物が例化する特徴のうちどれが『美そのもの』であるかは、決定できなくなってしまふってことね。なにしろ『美そのもの』は、他の抽象的対象とは異なる、いわば未知の抽象的対象だから、三つの具体物が共通に例化していて、なおかつ他のすべての具体物が例化していない特徴ということしか、アクセスの手がかりがない。そのうち二つが失われて、残り一つの具体物だけになったら、準拠すべき共通点がわからなくなってしまう」

「はい、輸送ケースを開けたとき二体のロボットに起きたのは、そういうことだと考

えられます。世界でたった一つだけ、特定の抽象的対象を例化した具体的対象が残っているとき、それはどんな抽象的対象なのでしょう？　これが例えば文学作品のように、個々の文のような下位の抽象的対象に還元できる場合であれば、何ら問題は起きなかったでしょう。たとえある文学作品のすべての例化物が失われたとしても、文が失われたわけではありませんから、もとの文学作品を形而上学的に同定することは可能です。しかし、イクタさんが制作したのは、既存の抽象物とはまったく異なる、そうした還元関係に支えられていない芸術作品のはずでした。ではそれはどんなものか？　おそらく選択肢の一つは、残った唯一の具体的対象の自然な特徴を恣意的に切り出して組み合わせたようなものです。しかしロボットのお二人に、そのような切り出しを行って、イクタさんの制作的意図にあった抽象的対象と衝突させる権利はなかったでしょう。もう一つの選択肢は、残った白い布のボールのすべての特徴を合わせたものが、『美そのもの』を例化していると考えることです。しかしこれも問題外で

す、なぜならその場合、『美そのもの』は白い布のボールそのもの、つまり具体物に墮落してしまうことになりかねませんし、消失した他の存在者が、布のボールの特徴すべてを同様に例化していないことは明らかだからです。残った選択肢は、そんな抽象的対象はない、消失してしまった、というものだったのです」

形而上学の議論には、よく登場するパターン、議論の型のようなものがある。ヘリンが言っているような、恣意的・すべて・ゼロの選択肢の分類もその一つだ。存在者のいくつもの組み合わせのうち、何らかの特徴を備えると言えるのは、ある基準に基づいた特別な組み合わせか、基準なくすべての組み合わせがそうなのか、あるいはすべての組み合わせについてそう言えないのか。恣意的・すべて・ゼロの場合分けのうち、『美そのもの』消失事件で起きたのは、最後のゼロの場合というわけだった。

「つまりこうね。ロボットは箱を開けて、運んでいたはずの白いボールがちゃんと存在するのを確認した。でも残り二つが消失したと信じているロボットにとって、それ

は『美そのもの』の例化物とは言えなかった。そうすると、『美そのもの』の例化物はこの世に存在しなくなったことになる。それは、例化物に依存した抽象的芸術作品である『美そのもの』の消失を意味する」

「はい。そうやって、ロボット警備員に『美そのもの』の消失を信じさせたうえで、ガーネットさんは（そのかたが犯人だというのは間違いないでしょう）貨物室に入る許可を得て、もはや『美そのもの』と関係なくなったケースの中身を、悠々と処分したんだと思います。ロボットにとってはそれは、ただの残骸と言いますか、ケースの中のガスと同様、警護対象から考えれば無視できる存在だったわけですから」

ティロマは腕を組んで集中した。

「他の二隻がぶじだとわかったあとは？ 警備ロボットが消滅したと思っていた例化物が存在していたとわかれば、抽象的対象である『美そのもの』も、やっぱり復活するんじゃない」

「えーと、それについては、二つのお答えができると思いますね。まず、形而上学的理由があります。わたくしの理解するところでは、存在依存の関係というのは、依存先が存在しなければ依存元も存在しないことを保証する関係ですが、依存先がふたたび出現したとき起きることについては、何も言っていないません。この部屋からカーテンがなくなったら、カーテンの青さも同様になくなるでしょうが、カーテンが戻ってきたとき青さも戻ってくるかどうかは不明です。同じカーテンが漂白されたり、染色されてしまっているかもしれません」

テイロマは納得した。9 Bの場合、陽電子脳の活動が復帰したときには、9 Bの存在もまた復帰する、という路線をテイロマはとっていたが、それを論証するには、9 Bから陽電子脳の活動への依存関係に加えて、陽電子脳の表象内容の連続性など、より多くのことを言う必要があった。

「もう一つは、ロボット工学上の理由です。盗難があったとき、この星では時刻管理

サーバの不具合があり、ロボット警備員のお二人も、時刻に関して不安定な状態にあつたそうですね。詳しくは存じませんが、隔絶された環境にあるロボットは、自分の記憶を定期的に整理し、不要なバックアップを消去する必要があるのではありませんか？ その定期処理が、時刻サーバの不具合で不安定になり、より頻繁になった可能性はないでしょうか」

ロボットは見聞きしたことを、どんなささいなことでも永続的に記憶しておくことができるが、当然ながら記憶装置の容量には限りがあるため、定期的に外部の記憶装置に書き出して容量をあげる必要がある。だがそのメンテナンスが行えない場合、内蔵の記憶装置の容量があふれないように、スケジュールされたタイミングで記憶を標準化し、冗長だったり不要だったりする記憶を削除して、容量を圧縮する。現在時刻があやふやなロボットならば、そのタイミングが狂ったり、安全のためふだんより頻繁になることはあるだろう。

ゆっくりうなずいて見せると、ヘリンは壁にかけていたティロマのジャケットを取りながら続けた。

「ではおそらく、ロボットたちは『美そのもの』が消失したと判断した時点で、『美そのもの』の存在の実体を指すレコードを、記憶から削除したのでしよう。通常ならば、そうしたとしても『美そのもの』に関する多くの記憶が残っていて、その参照が生きているかぎり、実体のレコードの呼び出しを行うことはできるでしょうし、『美そのもの』がじつは存在していたとわかれば、レコードの復帰を行うこともできるんだと思います。ところが、そのときロボットたちは記憶の整理をしよっちゅう行っていたために、整理のタイミングで実体レコードを失った参照も、不要と判断して削除してしまったのではないでしょうか。その後で、『美そのもの』の例化物がぶじだったことがわかったとしても、ロボットたちにとってそれは記憶との照合上、『美そのもの』の復活を意味しなかった」

「時刻同期サーバを攻撃したのは、ガーネットの仲間だったかもしれないわけね。思ってたより大規模な犯罪の線もあるか」

ヘリンはつましく笑みを浮かべ、ティロマにジャケットを手渡した。弾痕で歪んだようになった部分が隠れるように、うまく整えてある。

「以上です。こちら、ブラッシングさせていただきました。よろしければ当店で、服飾に関するご相談も承っておりますので、新しいお召し物をご検討の際はぜひご利用ください」

「商魂たくましいね。ここ、下は相当ぼろぼろにやられてるよ。しばらくは営業できないんじゃない？」

やや意地悪につつくと、ヘリンは目を伏せて深々と詫びた。

「そうですね、お客様にご心配をおかけしたこと、申し訳なく思っております。ティロマさんがお越しでなければ、どうなっていたか」

「まあ、強盗にしちや、気合い入った連中だったよね」

受け取ったジャケットを羽織ると、テイロマはそつと立ち上がった。ヘリンの形而上学・分析美学についての能力は、期待以上の議論によってじゅうぶんわかった。この結果を報告すれば、あとはリクルータが硬軟織り交ぜた手段でアプローチし、ヘリンに転職をオファーするだろう。

いいタイミングで、大股な足音とともに、9Bが姿を現した。今度も隣室から顔だけをのぞかせる。

「テイロマ、救命活動は終わりました。あとは現地当局が対応してくれるでしょう。あまり時間がありません」

「わかった。それじゃありがとう、ヘリン。『美そのもの』の件、本当に参考になりました。あなたの名刺、もらってもいい？ 次来たときも、セラピー指名させて」

「よろしく願います」

ティロマは脱衣かごから端末を探り出し、電子名刺を近距離通信で受け取った。

「わたくし、もう少し、ティロマさんに今のお話のことを聞いてみたかったですけど……すぐ捜査においでになるんですか？ それとも……」

ヘリンが名残惜しそうに言うのを、自分の電子名刺を返送しつつ、ティロマはさえぎった。

「私たち、ここの警察とはあまり関わるつもりないんだ。もしここのお店に何かあったら、その名刺に連絡して。力になれると思う」

ダウンロード転送が終わったティロマの白地の名刺には、植物の装飾とともに、所属組織の名前が記されている。ヘリンは首を傾げた。

「有限責任会社 abc……これは？ コンサルタント？ 副業なさってるんですか？」

「ノー、それが本業。私ほんとうは、刑事でもなんでもないんだな。ごめんね、じゃあまた」

惑星ジェイの警察署に忍びこんで、盗んだIDを偽造複製したその足で、ティロマは形而上学刑事を装い、AAAを訪れたのだった。

物理カーテンを素早くぐり抜けたティロマは、9Bが取り戻してきたブーツに足をつっこみながら窓へ向かって歩いた。9Bがその長身を右腕だけで抱え、重力操作をしてふわりと窓から飛び降りる。当局の車両がアラートを鳴らしながらロータリーに入ってくるのを横目に見つつ、ティロマたちは目立たない路地裏へと身を潜めた。通信ジャミングネットの圏外まで出て、同僚に迎えをよこすよう連絡しなくてはならない。

三十一世紀のこの時代には、正義と悪とは形而上学によって支えられている。司法が形而上学刑事を捜査に投入する一方で、裏の世界には、違法行為のために哲学を訓練する組織が存在していた。三原則に縛られたロボットにさえ殺傷を行わせ、平然とアイデンティティを偽って私欲を暴走させる、悪のための哲学者集団が。

フュニカは受付まで重たい体を引きずつてくると、マットにどっかりと腰を下ろした。AAAで働いてまだ二週間にもならないが、この受付が自分の持ち場だと、フュニカは意識して強く考えるようにしていた。美術品固定用のラッカで全身を塗り固められた男は、やせてはいるらしいが着こんだ安物の伝導性アーマのせいもあって非常に扱いづらく、まだ男性身体に慣れていないフュニカにとっては、廊下を少し動かしただけで一苦勞である。石膏のように固められた男の腕を、渾身の力で顔面から引きはがしてやると、ヘルメットの奥におびえきった目玉が見えた。

「どこから来た？ だれか探してるのか？」

聞こえる距離までヘルメットに顔を近づけ、受付で愛想よくしているときとはまったく違う低い声でささやくと、男はやっと、指令されたターゲットの名前をつぶやくように明かした。

「そうかい、それでその女は見つかったのかい」

見つかったはずはなかった。ギャングたちを雇ってけしかけた連中が探している、美術故買詐欺の常習犯ガーネットは、いまはフュニカと名前を変え、金をかけた肉体交換により性別も戻して、ほとぼりが冷めるのを待っているところだった。

どたどたとした音に顔をあげると、廊下をライムイエローのロボットの巨体が駆け抜け、窓から飛び出していくところだった。声をかける間もない。武装ギャング集団をやっつけてくれたあの二人は、警察官とも思えないが、どこかの犯罪組織の下っ端か、あるいはフュニカ同様に組織すらも手玉に取る一匹狼か。フュニカにもすぐには判断できなかったが、詮索は無用だ。ともかくいまは、裏切ってきた無数の相手から身を隠し、無害な市民に化けておくのが先決である。

自動ドアが開き、防弾ベストを着こんだ大柄な私服の刑事たちが入ってきた。フュニカは素早く立ち、表情を整えた。いまのフュニカはAAA惑星ジェイ支店の受付の

青年として、捜査に従わなくてはならない。年齢に似合わず学生めいたラフな格好の刑事が、IDを投射するのを見ながら、フユニカはにこやかに頭を下げた。

### 主要参考文献

- 『ロボット小説集』2012、アーカイブ騎士団
- 『われはロボット』1983、アイザック・アシモフ著、小尾芙佐訳、早川書房
- 『ワードマップ 現代形而上学』2014、鈴木・秋葉・谷川・倉田著、新曜社